近世・近代における関ヶ原合戦の布陣認識

小池　絵千花

Abstract

はじめに

関ヶ原合戦は、慶長五年（一六〇〇）九月十五日に美濃国関ヶ原（現岐阜県関ヶ原町）で行われた、徳川家康を中心とする東軍と石田三成を中心とする西軍による「天下分け目」[1]の合戦である。この合戦に勝利した徳川家康が覇権を握る、日本史上の一大転換点であった。そのため多くの先行研究が存在するが、合戦の実像を明らかにしようと試みる研究[2]と後に形成された合戦像を探る研究[3]、いわゆる「実像」の研究と「虚像」の研究に概ね二分される。拙論「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」[4]では、長く定説とされてきた『日本戦史　関原役』（以下、『日本戦史』）記載の布陣情報と、近年浮上した新説の双方を検討した上で、蓋然性の高い布陣地を考察した。その過程で、『日本戦史』成立までに付加されていった雑多な情報を「虚」と一括して排除するのではなく、定説の構成要素となっている史料を総体的に把握した上で、それら一つ一つの史料的性質と情報の信憑性を分析する必要性を感じた。一次史料のみに基づいて歴史叙述を構築したからといって「虚」を廃せるわけではなく、虚像とされるイメージは歴史的な背景に基づいて形成されているからである。特定の史料以外を最初から検討対象外とするのではなく、まずは史料総体を把握した上で、現代に伝わる合戦像がどのような根拠（史料）に基づいてどのように形成され、それがどのように継承・普及していったのかを追うことは、事実そのものを把握してそこから妥当な解釈を行うためにも、イメージ形成とその背景にある人々の意識を探るためにも有用なのではないだろうか。

そこで本稿では、関ヶ原合戦本戦の「布陣地」を題材として、合戦が発生した慶長五年から布陣情報が固定される近代に記された史料総体を検討対象とし、布陣認識の変遷、定説の形成過程と継承・普及の様相を明らかにする。布陣地を検討対象とした理由は、地名・地形という通時代的なメルクマールが存在することで史料間の記載内容比較を行いやすい上に、近世・近代を通して合戦研究（近世の軍学、近代の戦史研究）の基礎情報として重要視されているからである。

第一章　布陣認識の変遷

本章では、合戦勃発時から布陣情報が固定される明治期までの関ヶ原合戦関連史料を通覧し、布陣叙述がどのように変遷したのかを分析する。関ヶ原合戦に参戦した各武将の布陣地を記した史料は、未翻刻未刊行のものを含めると膨大な種類と量が存在する。本稿では、関ヶ原合戦関連史料総体の記述の傾向を把握し、布陣情報の変遷を細かく追うために、検討対象とする史料の量を重視した。そのため、個々の史料に対する精緻な調査（正確な年代比定や諸本との比較作業）は後回しとなっている。また、できる限り多くの史料の蒐集・閲覧を試みたが、それでも本稿で扱えたのは関ヶ原合戦関連史料の一部に過ぎず、本稿の検討範囲のみでは文言の初出などは正確に把握できているとは言い切れない。これらの点は、後の研究進展[5]や他の指摘[6]を待ちたい。

本稿で使用した史料は、関ヶ原合戦と同年の古文書・古記録、太田牛一「内

府公軍記」杤山斉氏所蔵本[7]・大和文華館所蔵本[8]・名古屋市蓬左文庫所蔵本[9]、合戦当事者の覚書（「吉川広家覚書」[10]、「藤堂家覚書」[11]、「薩藩旧記雑録後編三」所収島津家臣団覚書[12]、「福富半右衛門親政法名浄安覚書」[13]、板坂卜斎「慶長年中卜斎記」[14]、「脇坂家伝記」[15]）、「戸田左門覚書」[16]、酒井忠勝・林道春・春斎編「関原始末記」[17]、「石川正西聞見集」[18]、「細川忠興軍功記」[19]、植木悦「慶長軍記」[20]寛文三年本・寛文八年本、山鹿素行「武家事紀」[21]、阿部忠秋「関原日記」[22]、「島津家譜」[23]、峯賀高亮「関ヶ原合戦誌記」[24]、貝原益軒・竹田定直他編「黒田家譜」[25]、「石田軍記」[26]、「関ヶ原御合戦記」[27]、木村高敦「武徳安民記」[28]、宮川忍斎「関原軍記大成」[29]、「関ヶ原軍記大全」[30]、「赤坂安楽寺旧記」[31]、松平頼寛「大三河志」[32]、久保之英「関ヶ原進退秘訣」[33]、堀麦水「慶長中外伝」[34]、「関ヶ原御合戦備書」[35]、「関ヶ原御陣御備手配留」[36]、「関ヶ原合戦聞書」[37]、「慶長擾乱」[38]、「武鑑要略慶長軍記」[39]、曽我祐準『関ヶ原戦史略』[40]、竹内正策・横井忠直編『関原戦記略』[41]、神谷道一『関原合戦図志』[42]、日本戦史編纂委員編『日本戦史 関原役』[43]、現地の標柱とその現住所である。史料に記載された布陣情報は【表1】【表2】にまとめた。以下、表から読み取れる布陣情報の変遷の傾向を分析する。

まず、慶長五年に書かれた古文書・古記録には、戦場全体の様子や具体的な地名はほぼ記されていない。記載内容は部隊相互の位置関係や距離、地形情報などごく部分的な情報に限られる。戦場全体を俯瞰した視点で捉え、東西両軍各武将の布陣情報の全体像が記されるのは、太田牛一「内府公軍記」（諸本が存在するがいずれも一六〇七年までに成立）からである。「内府公軍記」がその後の軍記に与えた影響は大きく、特に西軍の布陣地について石田・島津・小西隊が「藤子川を越え、小関に出、南東向きに備えた」ことと、宇喜多・大谷隊が「石原峠を下り、北西の山を背後に当てて、南東向きに備えた」とする記述を引き継いでいる軍記は、江戸時代を通して多数存在する。そして、「内府公軍記」で示された「北国街道と中山道を押さえて南北に展開する西軍と、それに対応して東側に布陣する東軍」という布陣の大まかな構図は、その後に書かれたほぼすべての史料に引き継がれている。しかし、この時点で提示されている布陣地は数隊まとめての大まかな情報であり、個別の武将には言及していない【図1】。

その後、一六四〇年代から、家の由緒を記すことで幕府の正統性を示そうとする意識に基づき幕府主導で家譜編纂が行われることになる（『寛永諸家系図伝』等）。幕府から自家の歴史を報告することを課された各大名家は、家臣に覚書類の提出を求めた。この際に多くの覚書が作成され（本稿で取り上げた覚書類も概ね当該期に作成されたものである）、この時期以降に幕閣によって作成された関ヶ原合戦記録（「関原始末記」【図2】、「関原日記」等）は、提出された覚書類から情報を収集したためか「内府公軍記」より布陣叙述がやや詳細になる。しかし、この時点でも小早川秀秋の布陣地を松尾山とする以外に具体的な布陣地名は増加しない。

武将ごとの具体的な布陣地名や、部隊編成、防御柵の位置などが記され、布陣情報が一気に増すのは、軍学者・植木悦が記した「慶長軍記」からである【図3】。一六六〇年代以降になると、幕府主導ではなく、軍学者によって物語性の強い軍記が編まれるようになる（「慶長軍記」「石田軍記」等）。また、関ヶ原合戦の布陣図の中には、軍学上の目的から作成された物が存在することも先行研究で指摘されている[44]。軍学者が軍記物語作成の主体となった一六六〇年代以降に書かれた史料は、軍学上の目的から各武将の布陣地を想像で補って比定したため、情報量が増加するのではないかと考えられる。

一七〇〇年代になると、物語性の高い軍記はあまり書かれなくなる。そのかわり、「武徳安民記」「関原軍記大成」「大三川志」「関ヶ原進退秘訣」といった考証意識の強い軍記が作成されるようになる。これらの軍記では、「或書曰～」「或説に～」といった文言で史料から得られた情報を列記した後、「按ずるに～」といった形で先行軍記の史料批判を行ったり、「私曰～」といった形で史料や先行軍記の記述とは分けて著者の考察を付したりしている。一七〇〇年代に記された考証意識の強い軍記では、情報が取捨選択されていくので、新たな情報はあまり増えていない。

また、「関ヶ原御合戦記」（以下、「御合戦記」）【図4】、「赤坂安楽寺旧記」（以下、「安楽寺旧記」）【図5】、「関ヶ原御合戦備書」（以下、「備書」）【図6】、「関ヶ原御陣御備手配留」（以下、「手配留」）等の、おそらく近世に関ヶ原の領主であった竹中氏の関係者によって書かれ[45]、写本でのみ地元美濃に伝来した、

【表1】 東軍武将の布陣情報

	徳川家康隊	福島正則隊	藤堂高虎・京極高知隊	松平忠吉・井伊直政隊	本多忠勝隊	田中吉政隊	細川忠興隊	黒田長政・竹中重門隊	池田輝政隊	浅野幸長隊	山内一豊隊
関ヶ原合戦と同年の古文書・古記録（1600）		内府先勢（『舜旧記』慶長5年9月15日条）／山中へ之先手（9月17日吉川広家自筆書状案）／為先手其外悉打続、敵切所を抱有所へ指懸（9月17日石川康通・彦坂元正連署状案）／先手之人数ハ、福島一番（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）	山中へ之先手（9月17日吉川広家自筆書状案）	為先手其外悉打続、敵切所を抱有所へ指懸（9月17日石川康通・彦坂元正連署状案）／南宮山へ之手あて（9月17日吉川広家自筆書状案）	南宮山へ之手あて（9月17日吉川広家自筆書状案）	先手之人数ハ福島一番・長岡越中二番・金森法印三番・田中兵部其外上方之人数四万斗（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）	内府先勢（『舜旧記』慶長5年9月15日条）／先手之人数ハ（中略）長岡越中二番（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）	山中へ之先手（9月17日吉川広家自筆書状案）	南宮山へ之手あて（9月17日吉川広家自筆書状案）		
「内府公軍記」杤山本（～1607年）	野山と関か原之間	御先陣／道すちを西向ニかゝられ	左ハ道より南	記述なし	中すちへ切て入	我不レ劣与、争レ先思々ニ嚏と懸られ	我不レ劣与、争レ先思々ニ嚏と懸られ	我不レ劣与、争レ先思々ニ嚏と懸られ候	此口（極井南岡か鼻）推之手	此口（極井南岡か鼻）推之手	記述なし
「内府公軍記」大和文華館本（1603～1607年）	野加ミと関か原之間	御先陣／道筋を西向に被懸	左ハ道より南	記述なし	中すちへ伐て入	北之山手治部少島津ニ向懸られ	中筋を西向に懸られ	中筋を西向に懸られ	此口（極井南岡か鼻）推之手	此口推之手	記述なし
「内府公軍記」蓬左文庫本（1607年）	野かみと関か原の間	御先陣／道筋を西向に各懸られ	左りは道より南／西向に懸り合	御先陣／道筋を西向に各懸られ	御先陣／道筋を西向に各懸られ	北の山手大将の治部少・嶋津兵庫頭にさし向懸られ	御先陣／道筋を西向に各懸られ／大谷刑部少・備前中納言・平塚因播守・戸田武蔵守そなへの口へ爰かしこへ諸方へかゝられ	御先陣／道筋を西向に各懸られたり／大谷刑部少・備前中納言・平塚因播守・戸田武蔵守そなへの口へ爰かしこへ諸方へかゝられ	此口（極井南岡か鼻）推の手	此口推の手	記述なし
関ヶ原合戦当事者の覚書類	治部・小西摂津守・備前中納言殿・大谷刑部少輔陣場とハ其間一里計り（『慶長年中卜斎記』）		和泉様御鑓先之敵は大谷形部少輔・脇坂中務・小川土佐・平塚因幡此四人（『藤堂家覚書』）						南宮へ之手宛（吉川広家覚書）		
「戸田左門覚書」（～1655年）	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	御先手／其節金吾中納言手の向は福島左衛門手也、然を左衛門大夫備を右の方江替させられ	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す	向て味方の備は何も絵図に記之か故略す
「関原始末記」（1656年）	関原本道の南、両宮山の北のはつれ	御先手／本道の南の方／先陣／道筋を西向に馳かゝり	御先手／本道の南の方／道より南へ打てかゝる	本道より北方／先陣に進て攻戦／浮田・島津か勢と相戦	御先手／本道の南の方／先陣に進て攻戦ふ／中筋より敵陣へかけ入る	本道より北方／二番勢にて山の手へ向ひ石田か陣へ打てかゝる	本道より北方／二番勢にて山の手へ向ひ石田か陣へ打てかゝる	本道より北方／二番勢にて山の手へ向ひ石田か陣へ打てかゝる	御旗本の後陣として本道より北方／南宮山の敵の御手充なるへきか	御旗本の後陣として本道より北方／南宮山の敵の御手充なるへきか	記述なし
「石川正西聞見集」（1660年）	御はた本は半途山陰に御ひかへ	先手へ（中略）指添被遣	記述なし	先手へ（中略）指添被遣	先手へ（中略）指添被遣	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし
「細川忠興軍功記」（1664年）	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	合戦初申迄ハ（加藤）左馬殿・（金森）出雲殿・黒田殿・忠興公御一所にて敵味方之位御見合／二度目之時忠興公御乗込	合戦初申迄ハ（加藤）左馬殿・（金森）出雲殿・黒田殿・忠興公御一所にて敵味方之位御見合	記述なし	記述なし	

	徳川家康隊	福島正則隊	藤堂高虎・京極高知隊	松平忠吉・井伊直政隊	本多忠勝隊	田中吉政隊	細川忠興隊	黒田長政・竹中重門隊	池田輝政隊	浅野幸長隊	山内一豊隊
「慶長軍記」(1663)	野上村ノ西、関ヶ原ノ間、桃クハリト云所ニ少高所	御先手一番／関ヶ原町筋西向ニ押通ル／関ノ明神ノ森ヲ後ニ当テ備ケル／敵ハ備前中納言	御先手一番／関ヶ原道ノ南／大谷刑部少輔ニ向フ	三番／下野守殿ハ先手ノ御大将／左衛門後ロ	南宮岡ヶ鼻押／南宮山岡カ鼻ノ押ニ在ケルカ、関ヶ原ノ合戦ヲ見テ馳来テ、横合ニカケ入／中筋ヲ突崩ス	御先手一番／石田・島津ニ向ヒケリ／先手ト（石田が）合戦	二番	二番／先手ト（石田が）合戦ス	南宮岡ヶ鼻押	南宮岡ヶ鼻押	大垣へ押へ
「慶長軍記」(1668年)	野上村ノ西、関原ノ間、桃クハリト云所ニ少高所	御先手一番／関原道筋西向ニ押通ル／関ノ明神ノ森ヲ後ニ当テ備ケル／敵ハ備前中納言	御先手一番／関原道ノ南／大谷刑部少輔ニ向	三番／下野守殿ハ先手ノ御大将／左衛門後ロ	南宮岡ヶ鼻ノ押へ／南宮山岡カ鼻ニ押ニ在ケルカ、関原ノ合戦ヲ見テ馳来、横合ニ馳入／中筋ヲ突崩ス	御先手一番／石田・島津ニ向ケリ／先手ト（石田が）合戦	二番	二番／先手ト（石田が）合戦ス	南宮岡ヶ鼻ノ押へ	南宮岡ヶ鼻ノ押へ	大垣ノ押へ
「武家事紀」(1673年)	野上ノ里ノ西、桃配ト云山原	明日ノ御先手／胴筋ノ道ヲ一文字ニ押行	山中北国勢ノ方へ	（明日ノ御先手福島左衛門大夫正則の）其次井伊・本多左右に備フ／宇喜多カ備へカヽリ	（明日ノ御先手福島左衛門大夫正則の）其次井伊・本多左右に備フ／島津義弘・宇喜多秀家カ陳ニハセ入	御旗本ニアリケルカ、所ノ案内者ナレハ是非先陳ヲ可仕由申システ、、諸手ノアトヨリ間道ヲヘテ小関村ヘヲシ出シ、逆徒三成カ陳へ切テカヽル	胴筋ヨリ（中略）カヽリ也	胴筋ヨリ（中略）カヽリ也／小関村ニヲイテ三成カ兵ニアタリ	南宮ノ押勢／樽井ト野上トノ間ノ山手ニ陣	南宮ノ押勢／樽井ト野上トノ間ノ山手ニ陣	南宮ノ押勢（中略）樽井ト野上トノ間ノ山手ニ陣
「関原日記」(～1675年)	野上ト関ヶ原トノ間	一番、東国方ノ先陣、道筋ヨリ西ニ向テカケ合セ、海道より北ノ方	十、道ヨリ南	井伊直政：七 松平忠吉：九	八、南宮山ノ備毛利秀元カ押ヘニアリシカ、関ヶ原合戦ノ体ヲ見テ横合ニカケコミ、島津義弘・浮田秀家カ陣ノ真中ヲ突キクヅス	五、海道ヨリ北ノ方	二陣、海道ヨリ北ノ方	黒田長政：四、海道ヨリ北ノ方	（南宮山の）押	（南宮山の）押	（南宮山の）押
「関ヶ原合戦誌記」(1687年)	野上ノ西、海道ノ南、桃クハリ原ト云所	海道ノ先手一番	松尾ノ敵へ被差向	三番／右ハ井伊侍従、中ノ陣ハ下野守忠義卿、是ハ先手	三番／左ハ本多中務	海道ノ先手一番	二番	黒田長政：二番 竹中重門：下野守殿トーヶ⊠ニ右ノ方ニ備ヲ立ル	岡ヶ鼻ノ押／垂井ノ山ノ東ノ方ニ陣ヲトリ、南宮ノ手当	岡ヶ鼻ノ押／垂井ノ山ノ東ノ方ニ陣ヲトリ、南宮ノ手当	岡ヶ鼻ノ押／垂井ノ山ノ東ノ方ニ陣ヲトリ、南宮ノ手当
「黒田家譜」(1688年)	垂井と関か原の間なる、野上の里の西、桃配とて海道より少南なる小高き所	左軍／大道の左右／先手／海道の左右を西向におす	左軍／大道の左右／先手／海道の左右を西向におす	中軍／其中筋を押かゝる／中の御先手井伊兵部少輔ハ、下野守殿をいさなひ、福島の勢の内を乗わりて先へ押出る	中軍	右軍／北の山手に備へ／海道の右を西向におし行	右軍／北の山手に備へ／海道の右を西向におし行	右軍／北の山手に備へ／長政ハ竹中丹後守当所の案内をしれる人なれは、是と同道し、他将にはなれて岩手山の末野をおし給ふ、是間道を経て胆吹山の麓、相川の北に出、直に関か原に向て石田か陣の横合にかゝらん／岩手山の間道より出来りて、横合に島左近か陣にかゝり	此（南宮山）おさへ／垂井と野上の里の間の山手に陣	此（南宮山）おさへ／垂井と野上の里の間の山手に陣	記述なし
「石田軍記」(1698年の刊本あり)	野上村の西、海道の南、桃配といふ山の原／野上と関原の間	一番の備／不破の関の明神の森を後に当て、山中宿の海道筋をぞ立切／東軍の先将／海道筋を南向に取掛／東軍の先陣／海道より北へ押出／小西・宇喜多・島津兄弟の人々と、相掛に馳寄つて、福島槍を始めし	一番の備／藤堂佐渡守高虎は、下野守殿備より、左の方に当つて、牧田海道に陣／藤堂・京極両人は、海堂の南へ押出／左の方は道より南／此表へは、大谷・平塚・戸田武蔵・津田長門守、馳せ向う	三番／木俣右京は（中略）井伊が胴勢引連れて、北国海道を、乾に向て備を立てたり／松平下野守は、福島が備に引下つて、上海道を絶断／此（福島）手の御横目は、井伊兵部少輔直政	三番／押勢と御旗本との其間、胆吹河原に残し給ふは、本多中務が胴勢／毛利が請手なるを見て、横合に駈入り中筋へ抜け出	一番の備／右の手先／胆山の麓／山の手より馳寄／北の山の手石田三成と秀雄両将駈合	二番／中筋／北の山の手（中略）石田三成と秀雄両将駈合	二番／中筋／黒田が北の山の手／北の山の手（中略）石田三成と秀雄両将駈合	南宮山に陣取せし西国勢の圧／垂井近辺	南宮山に陣取せし西国勢の圧／垂井近辺	一番の備

	徳川家康隊	福島正則隊	藤堂高虎・京極高知隊	松平忠吉・井伊直政隊	本多忠勝隊	田中吉政隊	細川忠興隊	黒田長政・竹中重門隊	池田輝政隊	浅野幸長隊	山内一豊隊
「関ヶ原御合戦記」(1706年写と記入された本あり)	関原ト野上村ノ間、桃配ト云野上山ノ下小山、海道左リ手	一／東国ノ先陣／西北ニ向テ駈合／海道北八幡宮ノ渡ヨリ海道ノ辺迄／西方ハ石田三成・小西行長・島津・宇喜多	九、京極修理太輔高政／十、藤堂佐渡守高虎／道ヨリ南／西国方戸田武蔵守・津田長門守・宇喜多・島津カ人数ト互ニ掛テ／海道中筋／小西・宇喜多人数ト働ク	六、井伊兵部少輔直政／是北国海道ノ左右八幡宮ノ後	八／道ヨリ南／西国方戸田武蔵守・津田長門守・宇喜多・島津カ人数ト互ニ掛テ先ヲ争フ／南宮山ノ敵、牧田口ノ押ニ十九夜ト云フ池ノ上ニ備在ケルカ関原左合ノ合戦ノ体ヲ見テ横合ニ駈込、島津義弘・宇喜多秀家ノ陣ノ真中ヲ突頽	五／海道北八幡宮ノ渡ヨリ海道ノ辺迄／西方ハ石田三成・小西行長・島津・宇喜多	二／北国海道ノ左右八幡宮ノ後／海道北八幡宮ノ渡ヨリ海道ノ辺迄／西方ハ石田三成・小西行長・島津・宇喜多	四、黒田甲斐守長政／北国海道ノ左右八幡宮ノ後／竹中丹後守重門ト加藤左衛門尉貞泰ハ陣所一所ニ雖有之、重門ハ領知故勝負ニ不構地形案内可仕之旨従家康公被仰付依之諸備ヲ回リ地利ノ案内也／海道北八幡宮ノ渡ヨリ海道ノ辺迄／西方ハ石田三成・小西行長・島津・宇喜多	此（南宮山岡ヶ鼻）押ニ垂井宿ノ町後、後生野ト云処	垂井ト野上トノ一里塚ノ西ノ野	十一／一里塚ヨリ西、桃配迄ノ間
「武徳安民記」(1708年)	垂井ノ西、灰配ト云山原	関東方ノ魁首／不破ノ関明神ノ森ヲ後ニアテ／山中宿ノ海道ヲ立切／凶徒ノ魁首浮田中納言秀家ト タヽカヒケル	彼（松尾山）オサヘ勢／最初ヨリ仰ヲ蒙リ金吾幷彼輩カ手 アテトシテ此表ヘ向ヒケル／大谷以下ヲ挫ヒシキ、石田・小西ヲ追ウチ	吾兵ヲハ家臣木股土佐ニ命シ御下知ヲ守リテ備ヘサセ松平下野守忠吉朝臣ノ備ニ往テ／忠吉朝臣ト相トモニ（中略）島津カ陣ヘ突入	南宮山ノオサヘ勢ト雪吹山ノ間ニ屯スル／横鑓ヲ入レ、真シクラニ中筋ヲ突破リ／忠勝遂ニ島津カ堅陣ヲ破リ	右ノ手先雪吹山ノフモト	関東方ノ魁首／中筋ハ細川・加藤ヲ先備	中筋ハ細川・加藤ヲ先備トシテ黒田甲斐守長政（中略）一列タリ	垂井口ヘ差向ラレ／南宮山ノ手アテ	垂井口ヘ差向ラレ／南宮山ノ手アテ	南宮山ノオサヘ勢ト雪吹山ノ間ニ屯スル／横鑓ヲ入レ、真シクラニ中筋ヲ突破リ
「関原軍記大成」(1713年)	野上村の西、海道の南、桃配といふ所	一番／関の明神を後に当て丶備／先陣／道筋を西向に、秀家卿の手へ討つて懸る	一番／大谷が先鋒へ向ひ	三番	三番	一番／小関野の敵と戦はん為めに、兵士を進めらる	二番／小関野の敵と戦はん為めに、兵士を進めらる	二番／黒田長政は、竹中丹後守に道路を案内させて、岩手山の麓に、相川より栗毛・小栗毛に至り、小栗毛の河原に備を立てられ	南宮山・栗原山の抑／垂井山の東の方に陣	南宮山・栗原山の抑／垂井山の東の方に陣	南宮山・栗原山の抑／垂井山の東の方に陣
「関ヶ原軍記大全」(1720頃)	野上村西、海道の南成桃配野村といふ所の山原	一番	一番組	先陣の御軍代ハ井伊兵部少輔直政／其（三番）次ハ松平下野守殿の御旗	惣軍の押には御軍代後陣の奉行本多中務太輔忠勝	三番	三番	二番／北の手より押出す	南宮山の押	南宮山の押	石田か備と見るならは一番に加藤左馬助・山内対馬守攻進るへしとの定
「赤坂安楽寺旧記」(1745年)	野上村西ノ街道ノ南、桃配山	壱番備／関ヶ原大関村境迄／一番備ノ衆中藤下村陣所ヘ申遣候得ハ早速関ヶ原北ノ野ヘ馳付	壱番備／関ヶ原大関村境迄／一番備ノ衆中、藤下村陣所ヘ申遣候得ハ、早速関ヶ原北ノ野ヘ馳付	三番備／五町程東	三番備／五町程東	壱番備／関ヶ原大関村境迄／一番備ノ衆中藤下村陣所ヘ申遣候得ハ、早速関ヶ原北ノ野ヘ馳付	弐番備／合川山四五町東八幡宮東ノ森迄	弐番備／合川山四五町東八幡宮東ノ森迄	南宮栗原筋押	垂井西壱里塚	壱番備／関ヶ原大関村境迄／一番備ノ衆中藤下村陣所ヘ申遣候得ハ、早速関ヶ原北ノ野ヘ馳付
「大三川志」(1763年)	野上村ノ西、海道ノ南ト関原ノ間ノ桃配原ノ少シ高キ所	先陣／本道ヨリ南方ニ陣／福島正則ハ宇喜多秀家ニ対シ／関ノ明神ノ林ヲ背ニ当テ陣、秀家ノ陣ニ向テ兵ヲ進メ	京極高知：忠吉君ノ陣ヨリ左／本道ノ南ニ当テ牧田海道ニ陣京極高知・藤堂高虎：先陣ニ属スト雖トモ実ハ松尾山ノ賊ニ備フ／本道ノ南／大谷吉隆ニ対ス	松平忠吉：正則ヨリ引退キ、上方海道ヲ取切リ、本道ヨリ北ニ陣 井伊直政：本道ヨリ北ノ方ニ陣／石田三成及ヒ島津義弘ニ対シ	本道ノ南ニ陣	本道ヨリ北ノ方ニ陣／石田三成及ヒ島津義弘ニ対シ	本道ヨリ北ノ方ニ陣／石田三成及ヒ島津義弘ニ対シ	本道ヨリ北ノ方ニ陣／石田三成及ヒ島津義弘ニ対シ／竹中重門ヲ嚮導トシ岩手山麓ノ間道相川ヨリ西、栗毛・北栗毛ニ到リ河原ニ備ヘ三成カ陣ニ向フ	後陣トシテ本道ヨリ北ニ陣シ、南宮山ノ賊徒ニ備フ	後陣トシテ本道ヨリ北ニ陣シ、南宮山ノ賊徒ニ備フ	本道ヨリ北ノ方ニ陣／石田三成及ヒ島津義弘ニ対シ
「関ヶ原進退秘訣」(1775年頃成立)	布陣地に関する記述なし	御先手ノ大名／一番／内府公一ノ先手	関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名／十番藤堂佐渡守高虎／十二番織田源五信益入道有楽子息河内守長孝、左ニ京極丹後守高知／内府公左股一ノ御先手	下野守忠吉卿ヲ以テ先陣ノ大将軍／御先手ノ御目代井伊兵部少輔直政・本多中務太輔忠勝／関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名／七番井伊兵部少輔直政／九番下野守忠吉卿	御先手ノ御目代／関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名（中略）八番本多中務太輔忠勝	関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名／五番田中兵部太輔吉政（中略）御先手／三成カ先手島左近等或ハ兵ヲ押出ス／海道ヨリ北ノ先陣	関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名／二番細川越中守忠興／海道ヨリ北ノ先陣	関ヶ原ニ出張スル御先手ノ大名／四番黒田甲斐守長政／御先手／三成カ先手島左近等或ハ兵ヲ押出ス／海道ヨリ北ノ先陣	南宮山岡ヶ鼻ノ敵ニ向ハシメ	南宮山岡ヶ鼻ノ敵ニ向ハシメ	十二番／右ニ山内対馬守一豊（中略）南宮山岡ヶ鼻ノ敵ニ向ハシメ玉ヒ

	徳川家康隊	福島正則隊	藤堂高虎・京極高知隊	松平忠吉・井伊直政隊	本多忠勝隊	田中吉政隊	細川忠興隊	黒田長政・竹中重門隊	池田輝政隊	浅野幸長隊	山内一豊隊
「慶長中外伝」（～ 1783 年）	本多忠勝か陣の弐町ほと後ろ／野上の西の海道乃南、桃配り原と云所	海道の先手、壱番	海道の先手、壱番／松尾山の敵へ差向らる	三番右の方、井伊兵部少輔直政、三番中の御陣には下野守忠吉卿	三番にハ左り方	海道の先手、壱番には福島左衛門太夫正則、此組には（中略）田中兵部太輔忠政〔ママ〕	二番	黒田長政：二番 竹中重門：此（松平忠吉）次に寄合衆四組にて、忠吉卿と直政の手と双方へ一ヶ論備へを立る	垂井の本の方に陣／南宮山の敵の手当	垂井の本の方に陣／南宮山の敵の手当	垂井の本の方に陣／南宮山の敵の手当
「関ヶ原御合戦備書」（～ 1785 年）	野上村之西、海道之南山麓桃配	関原西海道ヨリ南之方、大関村之関明神之辺迄／乾之方に向て陣取／海道之中筋／石田・小西・島津・浮田之勢と互に死を軽して戦ふ	関原西海道ヨリ南之方、大関村之関明神之辺迄／乾之方に向て陣取／中山道之道より南／浮田・島津之勢に互ニ掛	右、北山之東、茨谷と云所／関原町口之北に当る／北国海道之左右八幡宮之後	牧田海道十九女ガ池ノ野／中山道之道より南／浮田・島津之勢に互ニ掛	関原海道より北合川山口より八幡宮森迄／海道之中筋／石田・小西・島津・浮田之勢と互に死を軽して戦ふ	関原海道より北合川山口より八幡宮森迄／北国海道之左右八幡宮之後	合川山口より三町程東北之山手、丸山といふ所／右丸山ハ狼煙場／北国海道之左右八幡宮之後	垂井宿之後生野	垂井野上之間、一里塚	野上村之東
「関ヶ原御陣御備手配留」（成立年不詳）	野上村西、海道より南、山林之ふもと桃くはりといふ所／野上村桃くばりと言所の山原	関ケ原西海道より南、大関村関之明神へんまで出張り先陣／あい乃山道に旗を跡へ返しひそかに左り乃方へかゝり／海道乃中筋／石田・小西・島津・宇喜多乃勢とたかひに死をかろくして戦ふ	左り備／いぬゐの方に向ひて陣／海道の南へ押かゝり、関口乃すて戸をやふりてたゝかふ、／中山道乃南／宇喜多・島津ノ勢懸	同山（丸山）の東はき谷と言所／関ヶ原両口より北にあたる、但シ三番そなへ／中軍／四方迄守りて其よわき方をすくわんとする三段三将乃御備／直に道筋を押立、備前勢・小西勢・石田勢へかゝり合戦始め歟／北海道八幡宮乃うしろ	牧田海道十九女が池より■■（欠字）／三ばんの備／右ニ備ハちう軍としてよわき方むかへらるべき御手当／中軍／四方迄守りて其よわき方をすくわんとする三段三将乃御備／中山道乃南／宇喜多・島津ノ勢懸り	関ケ原海道より北相川山口より八幡宮森迄／海道乃中筋／石田・小西・島津・宇喜多乃勢とたかひに死をかろくして戦ふ	関ケ原海道より北相川山口より八幡宮森迄／直に道筋を押立、備前勢・小西勢・石田勢へかゝり合戦始め歟／北海道八幡宮乃うしろ	右之備ハ相川山口より三丁程東北のて丸山と言ふ所／丸山ハ■〔ろか〕うゑんば／北海道八幡宮乃うしろ	垂井宿南うしかい野（カ）／南宮山おさへ	垂井野上乃間一里塚／南宮山おさへ	大備／西ニ向ひて備
「関ヶ原合戦聞書」（成立年不詳）	野かみ村の西、海道の南、もゝくはりと云山原	一番備／御先手／本道筋を西に向ひ取掛	一番備／海道の南へ押出	三番備	三番備	一番備	二番備／中筋小西・島津・大谷刑部・備前中納言・平塚因幡守・戸田武蔵守備の方、南向にとり被掛	二番備／北の山手石田治部少・島津兵庫頭打向ひ被掛	南宮山の手へ被遣	南宮山の手へ被遣	一番備
「慶長擾乱」（成立年不詳）	関ヶ原桃賦原／御本陣ハ桃賦原ニ定メラレ、御自身ハ初ヨリ井伊直政ガ陣ニ居	西ニ向テ／石田ヲ当ニ陣ヲ張ル／先手ノ大将	遥東ノ方少シ引ヘテ／大谷・戸田ガ手、朽木・脇阪カ手両方ヲ兼テ請備ヲナス	二ノ手／少シ右へ引退キ井伊直政・本多忠勝夫ヨリ少シ後ニ下野守殿ノ御陣ヲ備フ／下野守殿ハ井伊直政トトモニ島津カ備ニ斬テ入	二ノ手／少シ右へ引退キ井伊直政・本多忠勝	西ニ向テ／石田ヲ当ニ陣ヲ張ル	其（福島等）次／島津ヲ当ニス／横合ニ蒐リ妻手ニナレバ木戸左衛門ニ下知ヲシテ備ヲ張出シ、浮田ガ備ヘニ攻蒐ル	其（細川等）次／浮田ニ向フ／横合ニ蒐リ、妻手ニナレバ木戸左衛門ニ下知ヲシテ備ヲ張出シ、浮田ガ備ヘニ攻蒐ル	南宮山ノ押へ	南宮山ノ押へ	其（福島等）次／島津ヲ当ニス／横合ニ蒐リ妻手ニナレバ、木戸左衛門ニ下知ヲシテ備ヲ張出シ、浮田ガ備ヘニ攻蒐ル
「武鑑要略慶長軍記」（成立年不詳）	野上関原之間、宮代ノ西ノ方	東国之魁首／道筋ヲ向西ニ駈合ス	自関原左ノ道筋、南藤堂佐渡守・京極侍従懸リ西向ニ相戦、終ニ追崩ス大谷之軍兵ヲ	東国之魁首／道筋ヲ向西ニ駈合ス／下野守相共ニ一番ニ駈入	大垣為押ト遣シ／毛利在請手ニ、見テ関原合戦ヲ、横合ニ駈入中筋	自北ノ原小関ノ村中チ、小西其外西兵出ス軽卒、此手先田中兵部・金森父子駈合四方入乱レ合戦	具体的な地名に関する記述なし	具体的な地名に関する記述なし	為メニ彼（南宮山）カ遣シ	為メニ彼カ（南宮山）遣シ	為メニ彼（南宮山）カ遣シ
『関ヶ原戦史略』（1888 年）	野上村ノ西、桃配原ノ小丘上	本軍（進撃軍）第一陣／関明神ノ林ヲ背ニシテ陣	本軍（進撃軍）第一陣／主トシテ松尾山ノ敵ニ対スヘキノ特任ヲ帯フ	本軍（進撃軍）第三陣　分ツテ左右中ノ三部トス、右　井伊直政　中　松平忠吉／第三陣ノ井伊・松平ノ兵亦漸次来リ、（第二陣の島津との交戦に）加ハヽリ	本軍（進撃軍）第三陣分ツテ左右中ノ三部トス、左　本多忠勝／石田別将ニ命シ、兵二千ヲ以テ北方高地ヨリ東軍ノ右翼ヲ突カント謀ル、東軍主将遥カニ之ヲ見テ第三陣ノ将本多忠勝ニ令シ之ニ備ヘシム	本軍（進撃軍）第一陣／北方即チ東ハ初メ第一陣ノ田中ノ兵石田ノ前隊ト銃戦ヲ開ク	本軍（進撃軍）第二陣／中央ニ在リテ／島津ト交戦	黒田長政：本軍（進撃軍）第二陣／島等其兵ヲ進メテ田中ノ隊ヲ撃ツ、第二陣ノ黒田之ヲ援ケ共ニ撃テ之ヲ柵ニ退ソカシム 竹中重門：本軍（進撃軍）第三陣　中　松平忠吉此組	二、垂井山支隊、此支隊ハ垂井山ノ東ニ陣シ、南宮山ノ敵ニ当タルヲ以テ任務トス／南宮山ノ麓ニ進ム	二、垂井山支隊、此支隊ハ垂井山ノ東ニ陣シ、南宮山ノ敵ニ当タルヲ以テ任務トス／南宮山ノ麓ニ進ム	二、垂井山支隊、此支隊ハ垂井山ノ東ニ陣シ、南宮山ノ敵ニ当タルヲ以テ任務トス

	徳川家康隊	福島正則隊	藤堂高虎・京極高知隊	松平忠吉・井伊直政隊	本多忠勝隊	田中吉政隊	細川忠興隊	黒田長政・竹中重門隊	池田輝政隊	浅野幸長隊	山内一豊隊
『関原戦記略』(1889年)	桃配	先頭　関明神ノ前／福島、浮田ノ両隊更ニ刀槍ヲ以テ接戦	牧田道ノ西　松尾山（中略）ノ敵ニ備フ／大谷ノ部下戸田・平塚等ノ隊ト接戦	茨原／井伊・松平進ンテ島津ノ隊ニ逼リ、刀槍戦ヲ始ム	十九女池ノ北／島津及ヒ小西ノ隊ニ向ヒ接戦ス／石田ノ兵二千ヲ分チ迂回シテ黒田等ノ隊ヲ側撃セシム、本多転戦シテ之ヲ却ケ又回リテ島津ノ隊ヲ側撃	丸山ノ南／石田ノ隊ト接戦	丸山ノ南／石田ノ隊ト接戦	丸山ノ南／石田ノ隊ト接戦	御所野／南宮山ノ敵ニ備	一里塚／南宮山ノ敵ニ備	野上村／始ハ南宮山ノ敵ニ備ヘ、後チ関原ニ進戦
『関原合戦図志』(1892年)	野上村ノ西、中山道ノ南、桃配山	一番隊、先鋒／関ヶ原ノ西、大関ニ至リ、関ノ明神ノ森ヲ後ニシ、中山道ノ南ニ備ヘ／西軍浮田秀家ガ天満山ノ陣ニ陣セリ	一番隊／中山道ノ南、柴井〈関ヶ原村〉ニ屯シテ以テ松尾山・山中等ノ西軍ニ備	三番備／井伊直政ハ関ヶ原駅ノ北、中山道ノ右ナル茨原ニ備ヲ立テ、其右少シ退キタル所ニ松平忠吉陣	三番隊、本多忠勝ハ関ヶ原ノ左、十九女池ノ西ノ野ニ備ヲ立ツ	一番隊／之（福島隊）ニ次テ（中略）田中吉政ハ順次中山道ノ北ニ列シテ以テ天満山以北ノ敵軍ニ対シ	二番隊／中山道ノ北、中筋〈関ヶ原八幡神社ノ後ヨリ相川ニ至ル迄北国道ニ沿ヒタル地ヲ云フ〉ニ備ヲ並列	二番隊／岡山ノ麓ニ屯ス、此諸隊ハ笹尾小池天満山ノ西軍ニ対セリ、〈竹中ハ小身ナルヲ以テ寄合衆一隊ノ中ニアリシガ此辺ノ地頭タルヲ以テ予テ家康ヨリ地理ノ案内ヲ為スベキ旨ヲ命ゼリ、此岡山ノ下ニ来リシハ蓋黒田ノ為ニ地理ノ嚮導ヲ兼チタルモノナルベシ〉	南宮山押ノ隊／垂井駅ノ西南御所野	南宮山押ノ隊／駅ノ西、一里塚	南宮山押ノ隊／是（池田・浅野）ヨリ野上村迄中山道ノ左右（中略）布列セリ、是レ皆南宮山ニ備フルガ為ナリ〈中村以下八名ハ或ハ南宮山ノ押ト書シ或ハ徳川ノ後軍ト書ス、然レトモ其陣地ハ皆野上村ノ中ニシテ同一処ナリ〉
『日本戦史関原役』(1893年)	桃配山	中山道ヲ西上ス、其先頭二縦隊ト為リ左／中山道ノ左ニ進ミ宇喜多隊ヲ射撃	之（福島・黒田隊）ニ続キ／進テ大谷ノ隊ヲ攻撃	松平忠吉ハ暗ニ前軍ヲ統督スルノ意ヲ以テ中央ニ進ミ井伊直政之カ輔翼／福島ノ隊ト共ニ大ニ宇喜多ノ隊ヲ攻撃	牧田路ヲ扼シテ南宮山ノ敵ニ備フ／南宮山ノ敵、決シテ下撃セサルヘキヲ断定シ、又全面ノ戦闘劇烈我カ軍往々退却ノ色アルヲ見テ進ンテ戦闘面ノ中央ニ出テ、小西・宇喜多ノ隊ヲ撃破シ、其大勢ヲ挫折シ、遂ニ島津ノ前隊ニ向フ	大垣及南宮山ニ備ヘシメ／田中ハ進ンテ本軍ノ先頭ニ加ハリ／石田ノ隊ニ向テ戦フ	石田ノ隊ニ向テ戦フ	中山道ヲ西上ス、其先頭二縦隊ト為リ（中略）右ハ黒田長政ノ隊ナリ／石田ノ隊ニ向テ戦フ／竹中重門ヲ嚮導トシ岩手山ノ麓ニ循ヒ相川ヲ経テ小栗毛ノ磧ヨリ進ミ、午前八時頃石田ノ前隊ノ側面ニ向フ	大垣及南宮山ニ備ヘシメ／垂井附近ノ御所野ニ屯シテ、以テ南宮山ニ備ヘ且本軍ノ後拒	大垣及南宮山ニ備ヘシメ／垂井・野上ノ間ナル一里塚／以テ南宮山ニ備ヘ且本軍ノ後拒	大垣及南宮山ニ備ヘシメ／山内・有馬ハ南宮山ニ備ヘ兼予備隊ト為リ
現代の石碑の位置	桃配山 関ケ原町大字野上1424-1	関ノ明神 関ケ原町大字松尾111	柴井 関ケ原町大字関ケ原2491-101	茨原 関ケ原町大字関ケ原908-3	十九女池西 関ケ原町大字関ケ原3441-1	甲斐墓 関ケ原町大字関ケ原959-2	地名無し 関ケ原町関ケ原811-104	丸山狼煙場 関ケ原町大字関ケ原732-27	御所野 垂井町宮代244	一里塚 垂井町118-1	石碑なし 関ケ原町大字野上1424-1

【表2】　西軍武将の布陣情報

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
関ヶ原合戦と同年の古文書・古記録(1600)	あをのゝ原（10月8日付秋田実季宛最上義光書状『横手市史　史料編、古代・中世』343号）／山へ取上（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）	山へ取上（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）	山へ取上（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）		（十四日）如山中、大刑少陣（9月17日吉川広家自筆書状案）／金吾手ヲカヘサレ候、其太刀場ニテ、大谷刑部討死（9月20日近衛信尹充近衛前久書状）			山中よりかミ道三里ほと隔候て、山ニ陣取（9月30日留守政景充伊達政宗書状）		山中よりかミ道三里ほと隔候て、山ニ陣取（9月30日留守政景充伊達政宗書状）	
「内府公軍記」杤山本（～1607年）	藤子川を越、小関村南ニ辰巳へ向て人数を備	藤子川を越、小関村南ニ辰巳へ向て人数を備	藤子川を越、小関村南ニ辰巳へ向て人数を備	石わら峠ニ居陣也、爰を引下ロシ藤子川を越、関か原より北之野へ人数推出し、西北之山を後ロにあて、段〳〵に辰巳へ向て足軽を出し	石わら峠ニ居陣／爰を引下ロシ藤子川を越、関か原より北之野へ人数推出し、西北之山を後ロにあて、段〳〵に辰巳へ向て足軽を出し	記述なし	記述なし	榧井南、岡か鼻と云山	榧井南、岡か鼻と云山	榧井南、岡か鼻と云山	榧井南、岡か鼻と云山

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
「内府公軍記」大和文華館本（1603〜1607年）	藤子川を越、小関村南に辰巳へ向而人数を備	藤子川を越、小関村南に辰巳へ向而人数を備	藤子川を越、小関村南に辰巳へ向而人数を備	石わら峠ニ居陣也、爰を引下ロシ谷川を越、関か原より北野へ人数推出シ、西北之山手を後ロニあて、辰巳へ向て軽率を出し	石わら峠ニ居陣／爰を引下ロシ谷川を越、関か原より北野へ人数推出シ、西北之山手を後ロニあて、辰巳へ向て軽率を出し	記述なし	記述なし	棰井南、岡か鼻と云山	棰井南、岡か鼻と云山	棰井南、岡か鼻と云山	棰井南、岡か鼻と云山
「内府公軍記」蓬左文庫本（1607年）	藤子川をこし、不破の関屋より北野の原小関村を出て、南ニ辰巳へ向て人数を備	藤子川をこし、不破の関屋より北野の原小関村を出て、南ニ辰巳へ向て人数を備	藤子川をこし、不破の関屋より北野の原小関村を出て、南ニ辰巳へ向て人数を備	石わら峠に居陣也、爰を引下ロシ谷川を越、関ヶ原北野へ人数推出し、西北の山手を後ロにあて、辰巳へ向て軽率を出し	石わら峠に居陣／爰を引下ロシ谷川を越、関ヶ原北野へ人数推出し、西北の山手を後ロにあて、辰巳へ向て軽率を出し	記述なし	記述なし	捶井の南、岡か鼻と云山	捶井の南、岡か鼻と云山	捶井の南、岡か鼻と云山	捶井の南、岡か鼻と云山
関ヶ原合戦当事者の覚書類	大垣を出て関ヶ原へ被参（『慶長年中卜斎記』）（島津隊の）東（「神戸久五郎覚書」1332〜1333号）／取合之賦一番（「大重平六覚書」1361号）／東者石田殿請取之陣場（「慶長五年於関ヶ原御合戦之砌木脇休作殿働之次第神戸五兵衛覚書写」1404号）	夫（石田陣）より右之方へ一町半程間（「山田晏斎覚書」1309〜1315号）／石田殿備御座候、夫より右之方江一丁半程間（「黒木左近平山九郎左衛門覚書」1405号）／弐番そなへ（「神戸久五郎覚書」1332〜1333号）／二番（「黒木左近兵衛申分」1329号）／二番中書様、三番備前中納言殿、其続　維新様（「大重平六覚書」1361号）／薩摩衆大方後之堀に逃入（「井上主膳覚書」1407号）／此方ノ御陳之前備前中納言殿、東者石田殿請取之陣場、此方ハ二番備（「慶長五年於関ヶ原御合戦之砌木脇休作殿働之次第神戸五兵衛覚書写」1404号）	大垣を出て関ヶ原へ被参（『慶長年中卜斎記』）	大垣を出て関ヶ原へ被参（『慶長年中卜斎記』）前ニ岡御座候而此方之陣よりハ見得不申候、中納言殿相山申候、其敵則此方之陣江相掛（「神戸久五郎覚書」1332〜1333号）／三番（「大重平六覚書」1361号）／備前中納言殿陳取　維新様御陳之間池有（「大重平六覚書」1361号）／惟新様御備より東之方（中略）此陳と池との間落行申候、（『薩藩旧記雑録後編三』無記名覚書1340号）／此方ノ御陣之前（「慶長五年於関ヶ原御合戦之砌木脇休作殿働之次第神戸五兵衛覚書写」1404号）		濃州山中に馳向（『脇坂家伝記』）	上之山（「神戸久五郎覚書」1332〜1333号）／うらかへり被仕、大谷刑部少輔殿江被掛合（「大重平六覚書」1361号）／大谷殿陳備後之岡（中略）岡より真下りニ責おろし、大谷殿勢を不残被討（『薩藩旧記雑録後編三』無記名覚書1340号）	左りの山の峰に備を立（『慶長年中卜斎記』）南宮山と関か原之間二里之中間（「吉川広家覚書」）	伊勢の内かうつこまと云所（『慶長年中卜斎記』）		南宮山の南栗原（「福富半右衛門親政法名浄安覚書」）／南宮山（「神戸久五郎覚書」1332〜1333号）
「戸田左門覚書」（〜1655年）	松尾山の下、自害か岡と云所	関原南の方南宮山、東の端／南宮山より人数を下シ立退	南宮に陣取（中略）治部少方より南宮に陣取小西摂州方江使を立、摂津守陣を関原に移す	北の方関原を引退浮田宰相・脇坂中務、その外五畿内中国の諸勢加て相備	合戦同日の布陣地に関する記述なし／大谷刑部少陣場藤川	北の方関原を引退浮田宰相・脇坂中務、その外五畿内中国の諸勢加て相備	松尾山（中略）松尾山の手より人数を下す	関原南の方、南宮山、東の端	記述なし	関原南の方、南宮山、東の端	南宮に陣取
『関原始末記』（1656年）	不破関原へ出張し小関の宿の北の山際に陣／石田か家老島左近先手	石田か後ろに陣	越前海道より関原の本道を限り（中略）段々に陣	越前海道より関原の本道を限り（中略）段々に陣を張る	越前海道より関原の本道を限り（中略）段々に陣を張る／藤川の台に大谷刑部少輔か陣取し小屋かけ	西の方、本道の南、松尾山の下	西の方、本道の南、松尾山の下	記述なし	南宮山の後ろ	南宮山の後ろ	南宮山の後ろ
『石川正西聞見集』（1660年）	筑前中納言殿陣取の下にて先陣の衆に治部少よせ合たゝかひ	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	うしろの山	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし
『細川忠興軍功記』（1664年）	大垣より関原へ廻り	記述なし	記述なし	記述なし	北国より大谷刑部少輔大軍にて関原へ出	記述なし	記述なし	南宮山へ押上け陣取	南宮山へ押上け陣取	記述なし	南宮山へ押上け陣取

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
『慶長軍記』(1663)	小関野天魔山ニ本陣ヲ居ケリ、後ロハ小池、前ニハ木戸柵ヲ付、二重柵ニシテ堅固也、先手ハ島左近・蒲生備中、別ニ柵木戸ヲ付テ備タリ	石田カ本陣ニ引続テ南ノ方、伊吹山北国海道ヲ取切テ、藤子川ヲ後ニ当テ小関ヨリ巽ニ備ヲ立	島津カ西南ノ方ヘ引サカツテ、藤子川ヲ前ニ当テ備ヲ立	小西カ南、石原峠ニ本陣ヲ居テ、先手ハ峠ノ下ニ備ヲ立	浮田カ備ノ南、関ヶ原道筋ノ北／南ニ筑前中納言、東ニ内府ヲ兼テ柵木戸堅固ニシテ備モ両方ヘ備タリ	松尾山ノ下	松尾山ノ下／九月十四日、松尾山ニ登テ陣	垂井ノ南ノ方、南宮山岡ヶ鼻／上ノ山	垂井ノ南ノ方、南宮山岡ヶ鼻	垂井ノ南ノ方、南宮山岡ヶ鼻	垂井ノ南ノ方、南宮山岡ヶ鼻
『慶長軍記』(1668年)	小関野天魔山ニ本陣ヲ居ケリ、後ロハ小池、前ニハ木戸柵ヲ付、二重柵ニシテ堅固也、先手ハ島左近・蒲生備中、別ニ柵木戸ヲ付テ備タリ	石田カ本陣ニ引続キ南方、胆吹山ニ北国海道ヲ取切テ、藤子川ヲ後ニ当、小関ヨリ巽ニ備ヲ立	島津カ西南ノ方エ引サカツテ、藤子川ヲ前ニ当備ヲ立	小西カ南、石原峠ニ本陣ヲ居テ、先手ハ峠ノ下ニ備ヲ立	浮田備ヲ南、関原道筋ノ北／中ニモ大谷ハ南ニ筑前中納言東ニ　内府方ノ敵アレハ、両方ヲ兼テ柵木戸堅固ニシテ備ヘモ両方エ備タリ、	松尾山ノ下	松尾山ノ下／九月十四日、松尾山ニ登テ陣	垂井ノ南ノ方、南宮山岡鼻／上ノ山	垂井ノ南ノ方、南宮山岡鼻	垂井ノ南ノ方、南宮山岡鼻	垂井ノ南ノ方、南宮山岡鼻
『武家事紀』(1673年)	小関村北山ノ尾ニ付テ陳ヲハル、長篠ノ例トナリテ陳ノ前ニヨイヨリ柵ヲ二重カマヘシム、島左近・蒲生備中先手タリ	小関ノ南ニアタリ、一段小高処ノ山ノ尾崎	ソノ（島津の）次	ソレ（小西・安国寺）ヨリ南ノ道筋マテ	関ヶ原ノ西北山中ニ陳ヲ張／石原峠山中	関ヶ原ノ西北、山中ニ陳ヲ張	松尾山	南宮山岡カ鼻	南宮山岡カ鼻	ソノ（島津の）次	南宮山岡カ鼻
『関原日記』(～1675年)	北国海道筋小関村／藤川ヲ越ヘ小関ノ南ニ出、巽ニ向テ備フ	藤川ヲ越ヘ小関ノ南ニ出、巽ニ向テ備フ	藤川ヲ越ヘ小関ノ南ニ出、巽ニ向テ備フ	関ヶ原峠ヲ引キヲロシ、谷川ヲ渡テ、関ヶ原ノ北ノ野ヘ押シ出シ、西北ノ山ヲ後ニ中テ巽ニ向テ陣	関ヶ原峠ヲ引キヲロシ、谷川ヲ渡テ、関ヶ原ノ北ノ野ヘ押シ出シ、西北ノ山ヲ後ニ中テ巽ニ向テ陣ス／小関ノ近所ニ陣ヲ張	記述なし	松尾山／大谷刑部少輔・平塚因幡守カ陣ニ討テカヽル	上垂井ノ南宮山岡ヶ鼻	上垂井ノ南宮山岡ヶ鼻	上垂井ノ南宮山岡ヶ鼻	上垂井ノ南宮山岡ヶ鼻
「島津家譜」(1684年)	記述なし	藤川を越、小関之南、巽向備を立	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし
「関ヶ原合戦誌記」(1687年)	北国海道小関野ニ本陣ヲ居、其先手トシテ島左近・蒲生備中小池村ニ張出シ、柵ヲ二重ニ付	三成カ右／此備ハ玉ノ藤川ヲ越テ巽ニ向テ陣ヲ張	其（島津隊の）次／谷川を前ニ当テ地利ヲ設備	石原峠ヲ引下シ、関ヶ原西北ノ山ヲ後ニシテ、是モ巽ニ向テ備	初ハ山中ノ上ニ居タリシカ、押下シテ太関藤川ヲ前ニ当岸ヨリ下ニ備	夫（大谷隊）ヨリ松尾ノ方ヘ次第ニトリ続テ（中略）陣ヲ張ル	松尾山／山上ニ備	南宮山ノ上	（南宮）山下	（南宮）山下	（南宮）山下
『黒田家譜』(1688年)	胆吹山の麓、関が原の乾の方、小関村の北に巽に向て陣をとり、関か原に柵をふりて其内に備へたり、家人島左近三千余の兵を以、柵の外小池村の辺に陣を張／石田か先鋒島左近	桑並の畑に陣を取、左近か傍にそふ	初藤川のむかひに陣取て居たりしか、石田ミつから其陣に行て後援を頼ミし故に、川を渡りて石田か陣の跡小関村の南に陣し、東に向て備を立	其（小西）後	石原山の嶺に陣取て居たりけるか、山より下りて藤子川を越、平場に備へて西北の山を後にあて、巽に向て備	其（松尾山）辺に在／大谷刑部少輔か備へたる大関村の北野へ向て、敵の右の方より弓鉄炮を放ちかけ	松尾山の上	南宮山岡が鼻／南宮山の下、岡が鼻	南宮山岡が鼻／南宮山の下、岡が鼻	南宮山岡が鼻／南宮山の下、岡が鼻	南宮山岡が鼻／其（岡が鼻）東南栗原山
「石田軍記」(1698年の刊本あり)	島左近を先手として、小池の宿の外辺に、柵を付けて備を固めけり／藤川を打越し、大関村の辰巳に向つて、人数を頓て備へ／三成が天魔山への備／北の方の野原、小関村の中	北国海道を引下つて立切りしは、後備／藤川を打越し、大関村の辰巳に向つて、人数を頓て備へ／拟北の方の野原、小関村の中	（石田の）右に備へ	山中峠にありしが引下し、谷川を打越して、関が原への人数を出し、西の山を後に当て、足軽をぞ出しける／中筋	其（脇坂）北／山中峠にありしが引下し、谷川を打越して、関が原への人数を出し、西の山を後に当て、足軽をぞ出しける	南西の川端には小川左馬助、其より北へ続いて脇坂中務	松尾山／谷川を打越して、大関村の北の野へ	栗原山岡が鼻	栗原山岡が鼻	栗原山岡が鼻	栗原山岡が鼻

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
「関ヶ原御合戦記」（1706年と記入された本あり）	関原ノ西、北国道小関村／小関村ノ北、合川山ノ尾崎ニ陣ヲ取リ、前二町程ニ柵ノ垣ヲ二重ニツケ／先手ニハ島左近・同新吉・蒲生備中、北国海道ノ左右ニ備ヲ立	三成陣所ヨリ五町程隔リ南ノ方ニ天満山ト云小キ山ノ二ツ並ヒ有リ、其山ノ北ノ方ノ山ニ陣ズ、東南ニ向テ人数ヲ立ルト也／私云（中略）山ノ後ニ備ヲ立ルト見エタリ、（中略）然レハ天満山ノ西ニ人数ヲ立ルト見	三成陣所ヨリ五町程隔リ南ノ方ニ天満山ト云小キ山ノ二ツ並ヒ有リ、其山ノ北ノ方ノ山ニ陣ズ、東南ニ向テ人数ヲ立ルト也、私云（中略）山ノ後ニ備ヲ立ルト見エタリ、（中略）然レハ天満山ノ西ニ人数ヲ立ルト見	三成陣所ヨリ五町程隔リ南ノ方ニ天満山ト云小キ山ノ二ツ並ヒ有リ、其山ノ北ノ方ノ山ニ陣ズ、東南ニ向テ人数ヲ立ルト也／私云（中略）山ノ後ニ備ヲ立ルト見エタリ、（中略）然レハ天満山ノ西ニ人数ヲ立ルト見	松尾山ノ北、山中山ニ陣／山中峠ヲ曳下シ、大関村ト藤下村ニ陣ス	山中峠ヲ曳下シ、大関村ト藤下村ニ陣	十四日松尾山ニ陣ス／人数ヲ大関村ノ南ヘ静ニ下シ大谷・平塚カ備ノ右ノ方ヘ掛ル	南宮山ニ備／南宮山岡ヶ鼻／西国勢人数南宮山ヨリ岡ヶ鼻迄	南宮山ニ備／毛利陣所ヨリ廿町余山続／南宮山岡ヶ鼻	南宮山ニ備／南宮山岡ヶ鼻	南宮山ニ備／南宮山岡ヶ鼻
『武徳安民記』（1708年）	小関村ノ南、天魔山ト云丸山ニ至リ、後ニ池ヲ負、地ノ利能ユヘ此所ニ屯シ、人夫ヲ出シ、竹木ヲ伐採陣所ノ前ニ柵二重構ヘ／玉藤川ヲワタリ、小関野南ニ巽ニ向テ備ヲ立テ、彼村中ヨリ旌ヲスヽメ／石田カ魁首島左近勝猛	玉藤川ヲワタリ、小関野南ニ巽ニ向テ備ヲ立テ、彼村中ヨリ旌ヲスヽメ	伊吹ノフモトニ陣／石原峠ヲ引下リ、谷ノ小川ヲワタリ、関原ノ北ニ出、西北ノ山ヲ後ニアテヽコレモ巽ニ向テ屯シケル	鷹尾山ニ屯シ／石原峠ヲ引下リ、谷ノ小川ヲワタリ、関原ノ北ニ出、西北ノ山ヲ後ニアテヽ、コレモ巽ニ向テ屯シケル	関藤川ヲ前ニ当テ、岸ノ下ニ屯	松尾山ノ近辺、平山	松尾山	雉子篭山／南宮山	南宮山	南宮山	南宮山
『関原軍記大成』（1713年）	小関山に本陣を居ゑ、先手は北国海道小関野へ張出し、小池村の前に柵木二重に立て、島左近（中略）は、柵の前に陣列／陣所の丸山	秀家の左の方／石田が陣に相続き備を立つ／桑波畑	秀家の左の方／石田が陣に相続き備を立つ	石原峠を後に当てヽ、巽に向ひ、山の尾崎に陣を居／別記に秀家の陣所も天満山なりと記す、正説なるにや覚束なし	其（宇喜多隊の）右の方／松尾山の麓／石田の如く柵を付け／初は山中の高陵に備へしが（中略）高陵を下り、大関藤川を前に当て、岸より下に陣	其右の方／松尾山の麓	松尾山	栗原山の嶺	南宮山の山頭に備へ	南宮山の山頭に備へ	栗原山の嶺
「関ヶ原軍記大全」（1720頃）	小関村の前にひしと柵を付	石田と陣を並て、藤子川を越して、小関村の南辰巳に向て備たり	西の山を後に当て、小池村の並	関か原の西の方へ夜明方に押出して陣	石原峠を下りて谷川を渡り、西北の山を渡して辰巳の方に向て備	記述なし	松尾山	南宮山	記述なし	記述なし	記述なし
「赤坂安楽寺旧記」（1745）	柵ハ小池村	柵ハ小関村	柵ハ天満山	同南ノ山	柵ハ宮ノ上	藤下村ニ柵	柵ハ松尾山	記述なし	記述なし	記述なし	記述なし
『大三川志』（1763年）	北国海道小関村ノ北巽ニ向ヒ天満山ノ側ニ陣ス／三成カ先鋒島左近清興（中略）小池村ニ張翼ス／馬入ヲ防ント二重ノ柵ヲ設ケ柵内ニ弓銃ヲ備ヘ陣ヲ柵前ニ布ク	三成カ陣ヲ去ル事五町、北国海道ヲ退ク天満山ノ北ニ陣シ、海道ヲ断チ切リ後備ニ処シケル／藤ノ小川ヲ越ヘ、不破ノ関ノ北野原、大関村ノ北ヘ出テ、巽ニ向ヒ三成カ右ニ陣	石原峠ヲ下リ、藤ノ小川ヲ渡リ、関原ノ北ノ野ニ出テ西北ノ山ヲ背ニナシ、川ヲ前ニ当テ、義弘カ陣ヨリ坤ノ方ヘ退キ巽ニ向テ陣ス	石原峠ヲ下リ、関原不破ヲ前ニシ、乾ノ山ヲ背ニシテ巽ニ向ヒ、山ノ末行長カ陣ノ南ニ陣	山中石原峠ニ陣／山ヲ下リ谷川ヲ越ヘ（中略）西北ノ山ヲ背ロニシ、大関藤川ヲ前ニ当テ、巽ニ向テ平場ニ陣ヲ設／陣前ニ柵ヲ構／秀家カ陣ヨリ南、街道ノ北ニアツテ秀家カ陣ト相去ルコト五町計	大谷吉隆カ陣ノ南、松尾山ノ方ニ続テ平山	関原ノ北、北国海道ノ西南、松尾山ニ東北ヲ向テ陣	南宮山栗原山岡ヶ鼻	南宮山栗原山岡ヶ鼻	南宮山栗原山岡ヶ鼻	南宮山栗原山岡ヶ鼻

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
「関ヶ原進退秘訣」(1775年頃成立)	天満山ノ麓丸山ニ本陣ヲ備／公（島津義弘）ノ御備ヨリ一町半ヲ隔ルトアレトモ、是レハ段々ニ備ヘタル内ノ御備ニ近ク備ヘタルヲ見タル説ナルベシ／三成カ備ハ数町先ニ柵二重ヲ振リ／先隊物主島左近	小池村御陣場／関ヶ原ノ乾ノ方ニ当ル小池村／公（島津義弘）ハ右ニテ少々前ニサシハナレテ小高キ岡ヲ置、岡ノ下辺ニ池有、此池ヲ右ニソムケ池ヨリ少シ引ノキテ備ヲ立	（島津と）一町余隔ト云	石原峠ヲ後ニ当テ、山ノ尾崎ニ陣ヲ居／公（島津義弘）ノ御陣ヲ五町計リ隔	藤川ノ台／石原峠ノ陣ヨリ兵を引下シ、谷川ヲ超ヘ関ヶ原ヘ押出シ、味方ノ山手ヲ後ロニシ、東ニ向ツテ陣ヲ張	布陣地に関する記述なし	松尾山	南宮山栗原山	南宮山栗原山	南宮山栗原山	記述なし
「慶長中外伝」(～1783年)	九国の海道、小関野に本陣を居へ、其先手とし島左近・蒲生備中小池村に張出して柵を二重に立て人数を立たり	関の藤川を越て、巽に向て陣をはる	藤川を越て谷川を前に当て地利設て陣	石原峠を引下し、関ヶ原の西北の山を後にして、巽に向て備へ	山中の上／押下して大関と藤川を前に当て、岸より下に備	夫（大谷隊）より松尾山の方へ取続	其（松尾山）山上	南宮山の上	（南宮）山の梺	（南宮）山の梺	（南宮）山の梺
「関ヶ原御合戦備書」(～1785年)	北国海道之方、小関村之内、篠尾と云処に青竹を以柵を結／島左近勝猛（中略）関原之北国海道左右ニ備を立る、島津・小西・備前右備之前	小池村	小池村之南、天満山	同南之方之山〈但図天満山続てなり〉	山中村北之入口、宮之上	松尾山筑前中納言秀秋右之山続キ、海道之南、居益之辺迄	松尾山	南宮山	南宮山	南宮山	南宮山
「関ヶ原御陣御備手配留」(成立年不詳)	関ヶ原北国海道に、関村の南つき尾と言所ニ、青竹を以て矢らひを二重ニゆひ／島左近（中略）関ヶ原北海道乃左右ニ備をたつる、島津・小西乃備の前／小関村南へ備を押出す、辰巳向ふてかけ出す	小池村／辰巳ニ向ひて備ふ	小池村南西天満山／東むきに向ふて備ふ	天満山ニつゞいて南の山	山中村北の入口、宮かみ／石原とふげ雲ひをより打くだし、関ヶ原北野へにんしゆうを出す、西乃山あとにあて足軽をいだす	此山（松尾山）つゞき、海道の南、居益宿乃へん迄	松尾山／関ヶ原町筋東向にかきる	南宮山	南宮山	南宮山	南宮山
「関ヶ原合戦聞書」(成立年不詳)	藤川をうち越、小せき村の南、辰巳に向て人数を備	藤川をうち越、小せき村の南、辰巳に向て人数を備	藤川をうち越、小せき村の南、辰巳に向て人数を備	山中峠の山ニ有之、爰を引おろし、谷川をうちこし、関ヶ原の北の野へ人数を出し、西の山を後に当	山中峠の山ニ有之、爰を引おろし、谷川をうちこし、関ヶ原の北の野へ人数を出し、西の山を後に当	松尾山より出、大せき村の北の野へ、後より鉄炮を打かけうら切	松尾山より出、大せき村の北の野へ後より鉄炮を打かけうら切	栗原山岡ヶ鼻	栗原山岡ヶ鼻	栗原山岡ヶ鼻	栗原山岡ヶ鼻
「慶長擾乱」(成立年不詳)	伊吹山ノ麓ノ方ニ当テ石田治部少輔三成柵ヲ構フ、一手ニ島左近（中略）ヲ脇備ニシテ南ニ向テ陣ヲ張ル	其（石田）次	其（島津）次／東ニ向テ陣	其（小西）次／小西ニ相並	南ノ方ニ張出	此（松尾山の）押ヘ	松尾山	南宮山	南宮山	記述なし	南宮山
「武鑑要略慶長軍記」(成立年不詳)	越藤川、小関ノ南向辰巳立備	越藤川、小関ノ南向辰巳立備	越藤川、小関ノ南、向辰巳立備	引下石原峠ヲ、渡谷川、押出ス関原ノ北ノ野ニ、西北ノ山ヲ当背ニ、是モ向辰巳、備之	引下石原峠ヲ、渡谷川、押出ス関原ノ北ノ野ニ、西北ノ山ヲ当背ニ、是モ向辰巳、備之、	具体的な地名に関する記述なし	松尾山	垂井南カ岡ノ鼻	垂井南カ岡ノ鼻	垂井南カ岡ノ鼻	垂井南カ岡ノ鼻
『関ヶ原戦史略』(1888年)	六　本道ノ北ヨリ伊吹山麓ノ間／左／北国道ヲ中間ニ置キ、小池村ニ陣ヲ占メ柵二重ヲ結ヒ、其将島勝猛・蒲生郷舎ヲシテ之ヲ指揮セシメ、其本営ヲ小関村ニ置ク／北方高地	六　本道ノ北ヨリ伊吹山麓ノ間／中左／玉ノ藤川ヲ越ヘ東南ニ面シ陣ヲ占メ	六　本道ノ北ヨリ伊吹山麓ノ間／中右／長谷川ヲ前ニシテ陣	六　本道ノ北ヨリ伊吹山麓ノ間／右／関ヶ原西北ノ山ヲ背ニシ東南ニ向ヒ陣	五　本道／藤川ヲ前ニシ陣	四　松尾山ト本道ノ間	三　松尾山	二　南宮山／山上／山上ニ陣	二　南宮山／山下／山下ニ陣	二　南宮山／山下／山下ニ陣	二　南宮山／山下／山下ニ陣

	石田三成隊	島津義弘隊	小西行長隊	宇喜多秀家隊	大谷吉継隊	脇坂安治隊	小早川秀秋隊	毛利秀元隊	長束正家隊	安国寺恵瓊隊	長宗我部盛親隊
『関原戦記略』（1889年）	小池ノ北及小関／黒田・田中・細川・加藤等ノ隊石田ノ隊ト接戦	小池ノ南	天満山ノ北	天満山ノ南	山中	平野	松尾山	南宮山	南宮山	南宮山	南宮山
『関原合戦図志』（1892年）	篠尾ハ〈笹尾ノ丸山ト云フ〉小関村ノ北、相川山ノ山尾ニアリ、今暁石田三成ハ玉ノ藤川ヲ渡リ、此処ニ著シ／辰巳ニ向ヒテ備ヲ立ツ／先鋒島勝猛〈左近〉（中略）等ハ左右ニ分レ矢来ノ前ニ戦隊ヲ配置	行長ト同ジク石原嶺ヲ下リ、玉ノ藤川ヲ越エテ、小池村北国街道ノ南、神田ノ小高キ岡ニ来リ、辰巳ニ向ヒテ備ヲ立	天満山東北／山ヲ背ニ当テ、寺谷川ヲ前ニ取リ、辰巳ニ向ヒテ備ヲ設	天満山南／其山腰	藤川ノ台／最初山中村宮上ノ陣所ニアリシガ、今朝ニ至リ山ヲ下リ、藤下村藤川ノ西、中山道ノ北ナル岸ノ上ニ陣ヲ移シタル／藤川ノ台ニ陣	平野	松尾山／此陣ハ山上ニ在ル	南宮山	（南宮）山下栗原村	（南宮）山下栗原村	（南宮）山下栗原村
『日本戦史関原役』（1893年）	陣地ヲ小関村ニ占メ、以テ北国海道ヲ扼ス／三成ハ其北方笹尾ニ在リ／島勝猛・蒲生郷舎前隊トナリ其東南ニ居リ、前ニ二重ノ柵ヲ施シ	三成ノ陣地ヲ距ルコト一町半ノ右ニシテ、小池村ヲ選定シ、東南ニ向ヒ陣地ヲ占ム／石田ノ前後隊ト犬牙相対シテ、恰モ北国街道ヲ挟メリ	島津隊ノ右ニ接シ、寺谷川ニ面シ、天満山北方ノ岡阜負フテ位置	一タヒ石原峠ニ至ラントシ、既ニシテ天満山ノ前ヲ選定シ、其兵ヲ前隊本隊ノ二ニ分チ東南ニ向テ配備シ／右翼中山道ヲ限リテ配備	初メ山中村ノ高地ニ在リ／其兵ヲ進メ、関之藤川ヲ前ニシテ配備／本道ヲ距ルコト八町ノ後方ニ在リ、柵ヲ施シ	平野ニ在リ、中山道ヲ隔テ、大谷ノ隊ニ連ナル	松尾山／松尾山上	南宮山	同（南宮山東南端）岡ヶ鼻	同（南宮山東南端）岡ヶ鼻	其（南宮山）東南端栗原山
現代の石碑の位置	笹尾山（左近は石碑なし）関ケ原町大字関ケ原4008	小池 関ケ原町大字関ケ原1869-3	天満山北 関ケ原町大字関ケ原2368-1	天満山南 関ケ原町大字関ケ原4146-1	宮上 関ケ原町大字山中30-1	平野 関ケ原町大字藤下476-1	松尾山 関ケ原町大字山中731-1	南宮山 垂井町宮代	石碑無し 垂井町宮代1401	石碑無し 垂井町宮代	地名なし 垂井町栗原1995

注1）　未翻刻史料の読点は適宜筆者が補った。翻刻が存在する史料も、原本と照合した上で翻刻の修正や、句読点の位置を変更したものがある。

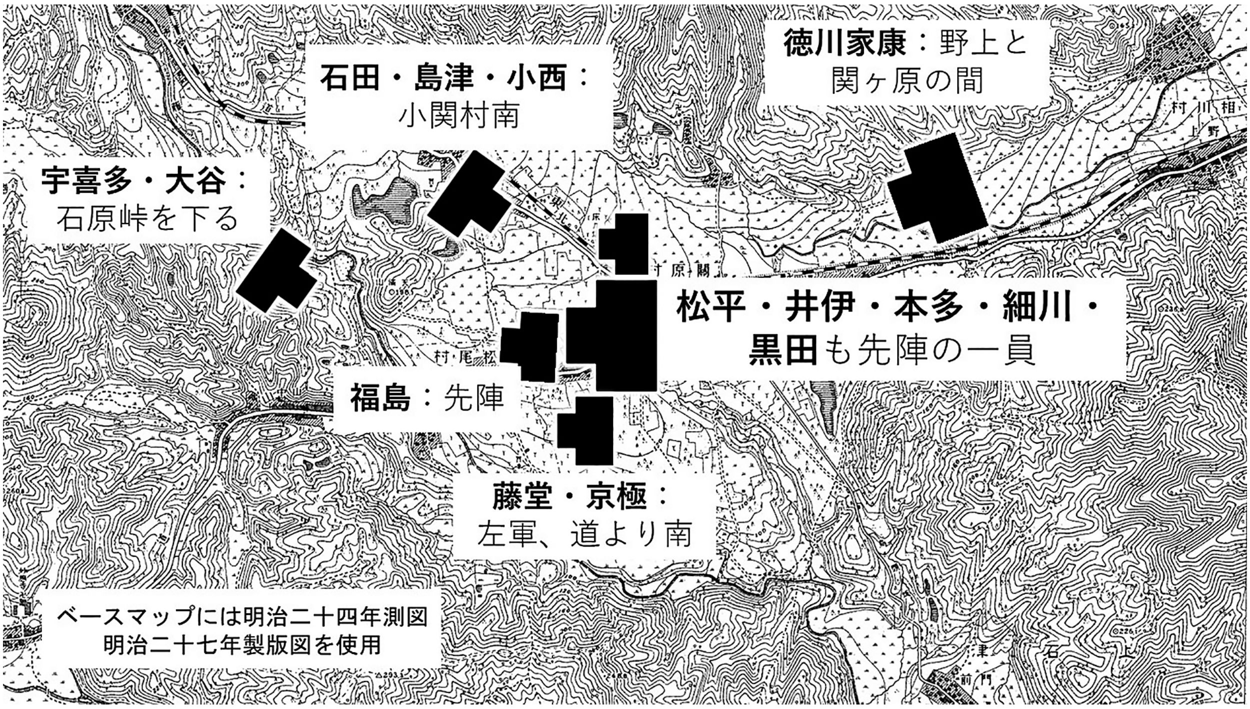
注2）　表を作成した武将は、現在関ヶ原古戦場に石碑または解説パネルが設置されている（行政から布陣地と認定されている）武将とした。

ローカル色の強い軍記の一群も存在する。これらローカルな軍記は物語性が薄く、簡素な戦闘叙述と布陣情報の列記が主な内容である。他の軍記に比べて具体的な地名が数多く記され、ローカルな軍記の一群に記載された布陣情報には共通点が多い。

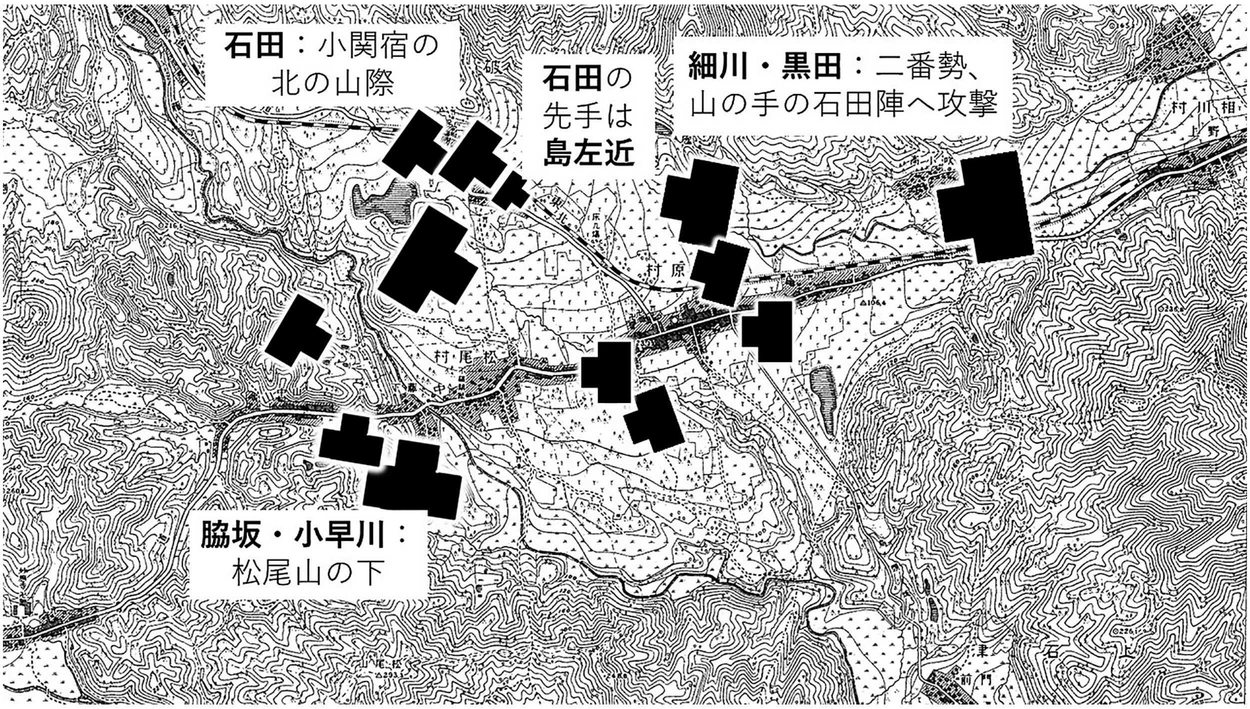
以上の通り、関ヶ原合戦の布陣情報は、十七世紀後半までは布陣叙述がだんだん詳細になり登場地名が増えていくが、十八世紀に成立した考証要素の強い軍記には新規情報が少なく、時代が下るほど新規情報が増えて記載が詳細になるわけではない。また近世を通して記述が同一方向に徐々に変化するような史料総体の連続性は見出せず、時期が下っても定まった布陣認識に収斂しない。近世には関ヶ原合戦の布陣認識について統一見解はなかったと考えられる。

また、「関ヶ原進退秘訣」（筆者の久保之英は島津家臣）に記載された島津隊の布陣情報はほぼ島津家臣団覚書と同情報、「関原軍記大成」（筆者の宮川忍斎は黒田家に仕官）に記載された黒田・竹中隊の布陣情報は「黒田家譜」とほぼ同情報、東軍の編成を「一番／二番／三番（右・中・左）」に分類する「関ヶ原合戦誌記」の記述は、「慶長中外伝」『関ヶ原戦史略（本書は明治時代に成立。以下、『史略』）』にほぼそのままの形で引き継がれており、近世軍記は筆者の立場とその人物が閲覧可能だった史料に記載内容が直接的な影響を受けることがわかる。

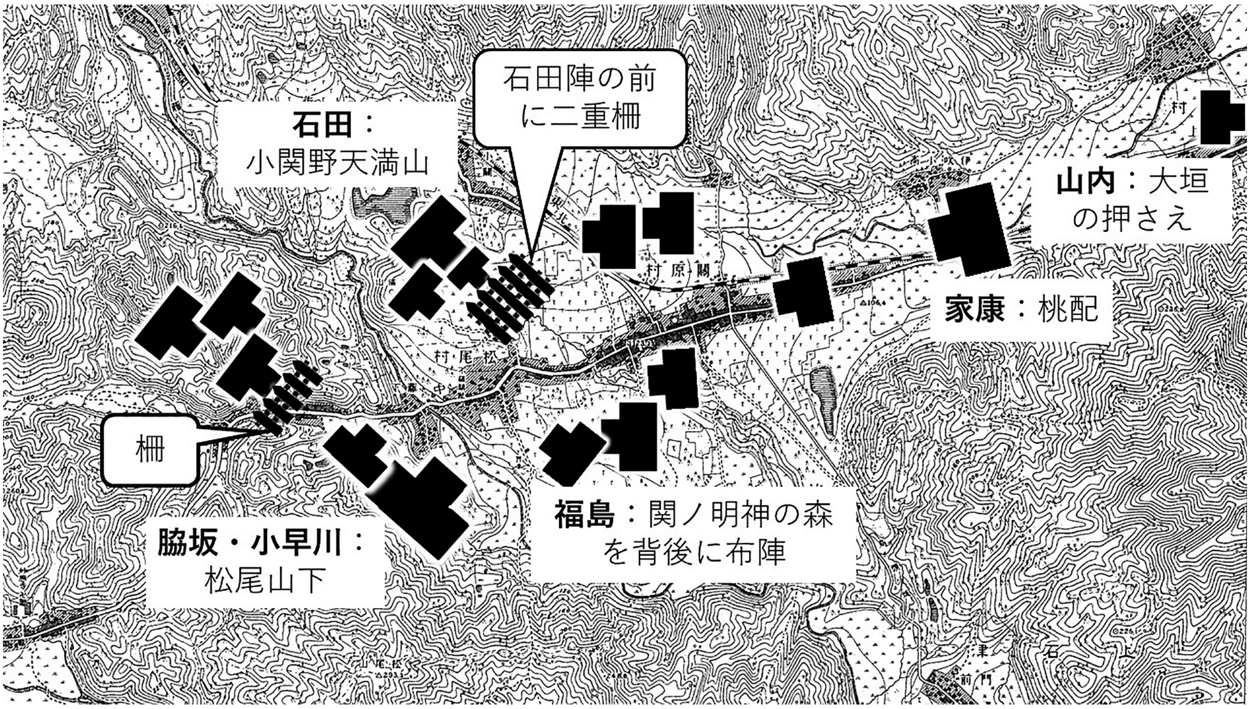
関ヶ原合戦の布陣情報は定まった形に収斂しないまま近代になり、明治時代に書かれた『関原合戦図志』（以下、『図志』）『日本戦史』の記載内容が、多くの関ヶ原合戦関連書籍や関ヶ原古戦場現地の標柱・解説パネルに反映され、概ね現代に伝わっている【図7】。



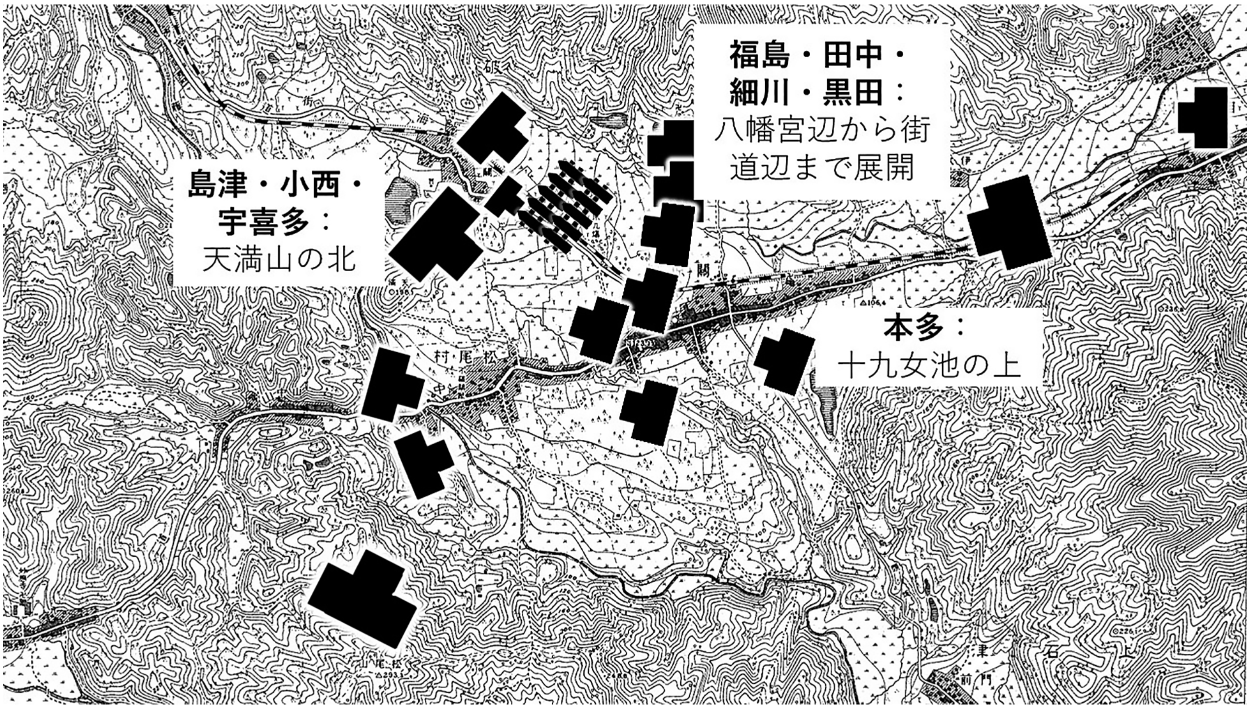
【図1】「内府公軍記」蓬左文庫本記載の布陣情報



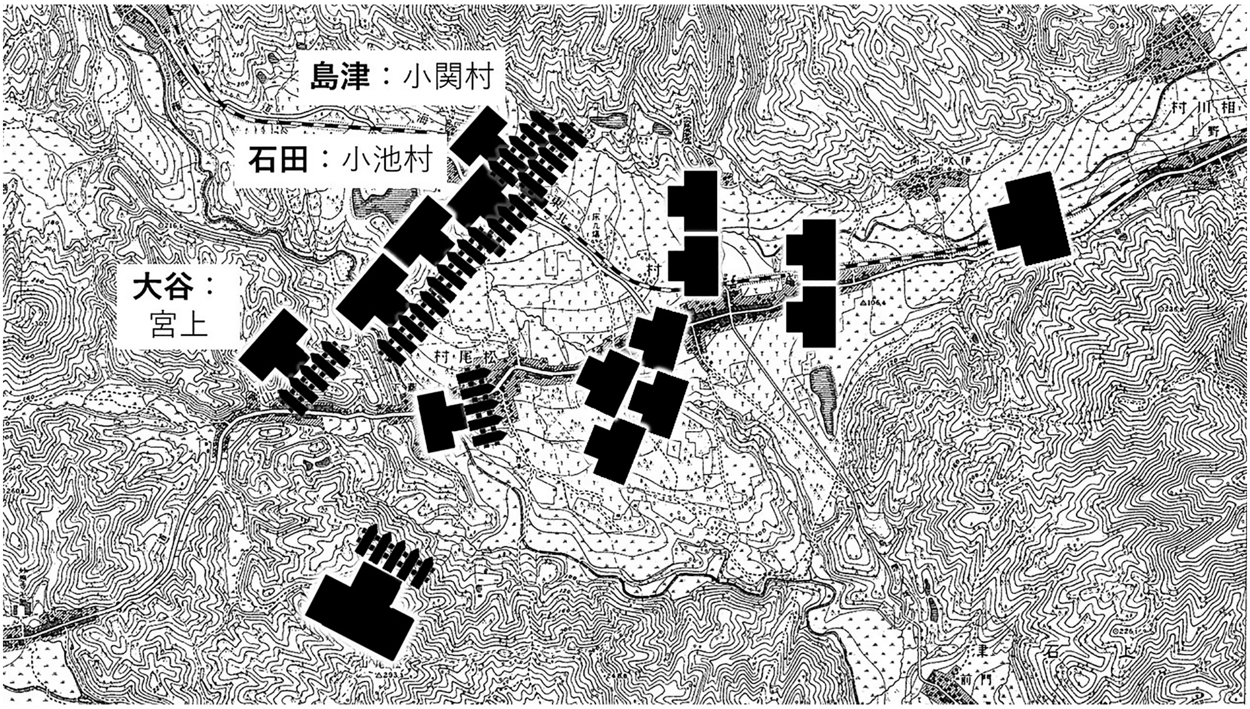
【図2】「関原始末記」記載の布陣情報



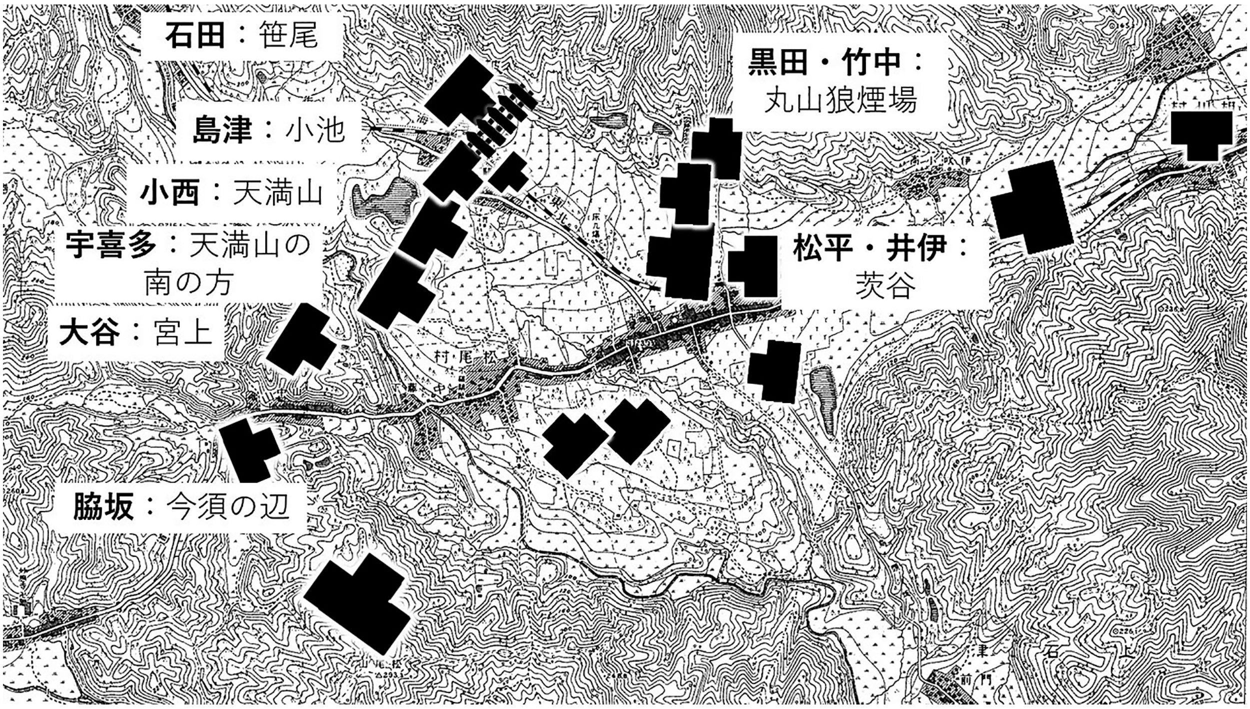
【図 3】「慶長軍記」記載の布陣情報



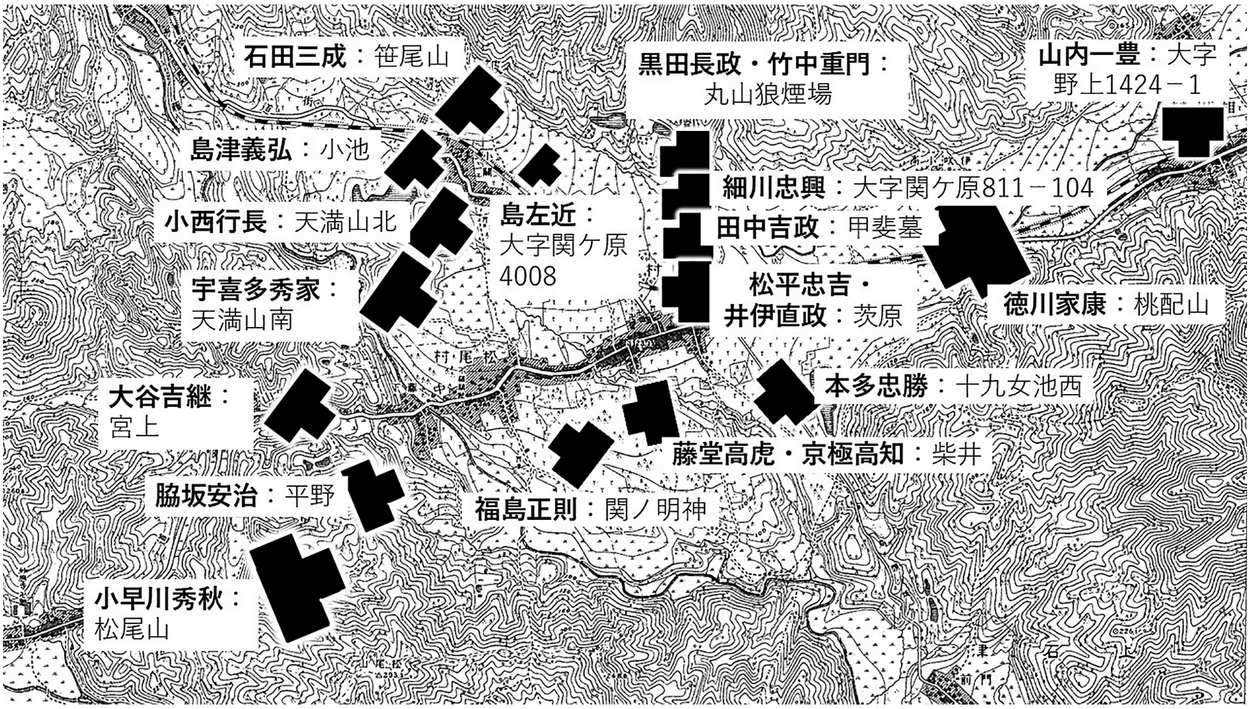
【図 4】「関ヶ原御合戦記」記載の布陣情報



【図 5】「赤坂安楽寺旧記」記載の布陣情報



【図 6】「関ヶ原御合戦備書」記載の布陣情報



【図７】『日本戦史　関原役』附図第５号拡大図＋標柱に記された地名

第二章　布陣認識の形成

本章では、現代定説となっている布陣情報【図７】がどのように形成されたのかを武将ごとに検討する。武将名下の鍵括弧内の地名は関ヶ原古戦場現地に建っている標柱に記された地名で、丸括弧内は標柱の現住所である。

○東軍

徳川家康「桃配山」（関ヶ原町大字野上一四二四-一）

「桃配」地名は「慶長軍記」以降に書かれたほぼすべての軍記に登場する。ただし、「少高所」「山原」「原」と地形の表現は一定しない。「桃配山」表記の初出は「安楽寺旧記」だが、以降に記された史料でも地形表現は一定しない。『図志』『日本戦史』で「桃配山」という表現が採用され、標柱にも刻まれている。

福島正則「関ノ明神」（関ヶ原町大字松尾一一一）

福島正則が東軍の先陣を務めた旨は同時代史料を含むほぼ全ての史料に共通し、史料間の矛盾や記述の差異は少ない。「関ノ明神」という地名は「慶長軍記」が初出であり、「石田軍記」「武徳安民記」「関原軍記大成」「大三川志」「備書」「手配留」にも記載され、明治期の書籍にも引き継がれている。

藤堂高虎・京極高知「柴井」（関ヶ原町大字関ヶ原二四九一-一〇二）

近世の史料を通して具体的な布陣地名こそ登場しないものの、藤堂隊と京極隊が同一行動をとったこと、中山道の南を進軍したことは、「内府公軍記」以降のほとんどの軍記で共通し、史料間の矛盾や記述の差異はほぼない。標柱に記された「柴井」は、近世史料には登場しない地名であり、初出は『図志』である。『図志』の付録として同書に収められている「関原陣地考証」（以下、「陣地考証」）には、「黒田氏関原記」「備書」の記述を実地に当てはめたところ関ヶ原町と大関の間にある関ヶ原の出郷柴井の地が藤堂・京極隊の布陣地に当たるだろうと考えてこの地に比定した、とある。

松平忠吉・井伊直政「茨原」（関ケ原町大字関ケ原九〇八-三）

井伊直政・松平忠吉は、同時代史料と「内府公軍記」では単に先陣と記されているが、「慶長軍記」「関ヶ原進退秘訣」には松平忠吉が先手の大将であったと書かれ、「関ヶ原合戦誌記」「慶長中外伝」では松平忠吉は「中の陣」であったとやや布陣地が後方になっている。松平忠吉と井伊直政が同陣（または隊が隣接）であったことは、「内府公軍記」以降全ての軍記で一致している。標柱に記された地名は「茨原」だが、近世史料に登場する地名は「茨谷」（「手配留」）である。「陣地考証」には、「手配留」に基づいて実地調査を行ったところ「茨谷」は大軍が布陣できる場所ではなく、関ヶ原町の北に存在する「茨原」であれば大軍が展開できることから、「茨谷」は「茨原」の誤記と判断し松平忠吉・井伊直政隊の布陣地を茨原とした、とある。『図志』刊行以前に『日本戦史』編纂委員が作成した『関原戦記略』（以下、『戦記略』）でも布陣地は「茨原」とされており、『図志』刊行以前から布陣地は「茨原」と認識されていたようである。

本多忠勝「十九女池西（つづらいけ）」（関ケ原町大字関ケ原三四四一-一）

本多忠勝は、「関原始末記」までの史料では合戦勃発時から戦闘に参加しているが、「慶長軍記」以降は元々南宮山の敵に備えていたが途中から戦闘に加わったとする記述が増え、最終的に後者の見解が主流となる。標柱に記された地名は「十九女池西」で、「十九夜池」地名は「御合戦記」（「十九夜ト云フ池ノ上」）、「備書」（「十九女ガ池ノ野」）等と、近世のローカルな軍記に登場する。十九女池の西に布陣したと初めて記述したのは『図志』であり、この記述が標柱にも採用されている。

田中吉政「甲斐墓」（関ケ原町大字関ケ原九五九-二）

田中吉政は、「内府公軍記」大和文華館本以降の史料では、戦場の北方に向かい石田三成隊と交戦した旨が共通して記載されている。「武家事紀」には、田中吉政は元々徳川家康の旗本にいたが、土地の案内者として先陣に加わったという独自情報が記載され、これは『日本戦史』にも採用された。標柱に記された「甲斐墓」は近世史料には見えない地名であり、『図志』が初出である。「陣地考証」は「古記及ビ実測ヲ欠ク」と、田中隊の明確な布陣地が不明である旨を添えた上で、関ヶ原村内の該当しそうな場所の地名として「甲斐墓」と記している。

細川忠興 石碑に具体的な地名なし（関ケ原町関ケ原八一一-一〇四）

細川忠興の布陣地について具体的な地名が記載された史料はないが、中山道より北方に進軍し、石田隊と交戦したという記述は「関原始末記」以降の概ねの軍記で一致している。より具体的な記述としては、田中隊・黒田隊と共に「北国海（街）道ノ左右八幡宮ノ後」に布陣したとする記述が「御合戦記」に見られ、「安楽寺旧記」「備書」「手配留」にも同様の記述が見える（黒田隊と同所に布陣した旨は「細川忠興軍功記」にも記載されている）。また、史料上に具体的な地名が登場しないだけでなく、石碑にも地名が記されていないが、これは細川忠興陣跡碑が他の武将の標柱（明治三十九年設置）と違い、異なる形状で平成二十五年に設置されたものだからである。

黒田長政・竹中重門「丸山狼煙場」（関ケ原町大字関ケ原七三二-二七）

黒田長政が中山道より北方に進軍し、石田隊と交戦したという記述は「関原始末記」以降のほとんどの軍記で一致している。「黒田家譜」以降の概ねの軍記では黒田長政と竹中重門が同陣しており、「黒田家譜」「関原軍記大成」「大三川志」『図志』『日本戦史』では竹中重門が案内を務めて間道から黒田隊を石田隊のもとに導いた旨が特記されている。その一方で、「関ヶ原合戦誌記」「慶長中外伝」『史略』では、竹中重門は黒田隊ではなく、松平忠吉隊の中にいたとしている。『図志』はこの矛盾を、「元は松平隊の中にいたが、土地の案内をするために黒田隊と同道した」と解釈することで解消しようと試みている。標柱に書かれた「丸山狼烟場」の出典は「備書」「手配留」であり、両書には黒田・竹中隊は丸山という所に布陣し、丸山は狼煙場であると記されている。

池田輝政「御所野（ごしょの）」（垂井町宮代二四四）

池田輝政の布陣地は同時代史料に「南宮山へ之手あて」（九月十七日吉川広家書状案）とあり、この旨は以降全ての史料に共通している。池田輝政の布陣地を「御所野」とする初出は、「後生野」と現代の漢字表記とは異なっているものの「御合戦記」である。『戦記略』には「御所野」と記されており、『図志』『日本戦史』も同表記である。

浅野幸長「一里塚」（垂井町一一八-一）

浅野幸長が南宮山方面の押さえとして布陣した旨は「内府公軍記」以降の全ての史料に共通している。浅野幸長の布陣地を「一里塚」とするのは、「御合戦記」に「一里塚ノ西ノ野」とあるのが初出である。本書では一里塚がある地点そのものではなくその西に布陣したとしているが、「安楽寺旧記」には「壱里塚」とあり、『戦記略』『図志』『日本戦史』では「一里塚」と記している。

山内一豊 石碑なし（関ヶ原町大字野上一四二四-一）

本稿で扱った東軍武将の中で、史料による布陣情報の差異が最も大きいのが山内一豊である。「慶長軍記」「武家事紀」「関原日記」「関ヶ原合戦誌記」「御合戦記」「武徳安民記」「関原軍記大成」「関ヶ原進退秘訣」「慶長中外伝」「備書」「武鑑要略慶長軍記」『史略』『戦記略』『図志』『日本戦史』には山内一豊は南宮山の押さえであった（そのうち、「武家事紀」「備書」『戦記略』『図志』には、現在解説パネルが設置されている「野上」地名が見える）と記されているが、その一方で、「石田軍記」「安楽寺旧記」「関ヶ原軍記大全」「大三川志」「関ヶ原合戦聞書」「慶長擾乱」では関ヶ原本戦の先陣に加わったと書かれている。なぜこの矛盾が発生したのか。「内府公軍記」蓬左文庫本には南宮山への押さえが「羽柴三左衛門（池田輝政）・浅野左京大夫（幸長）・駿河衆・遠江衆」と記載してあり、この「遠江衆」を当時遠江国内に領地を持っていた武将とすると、一豊もここに含まれる(46)。しかし、同書には山内一豊の家臣・樫井多兵衛が合戦の前線で戦ったとの記述も存在する。「遠江衆」に一豊を含むと解釈するか、山内家臣が前線で戦ったとする記述を重視するかで、見解が分かれた結果、本によって布陣情報が大きく変わるのではないだろうか。

○西軍

石田三成「笹尾山」（関ヶ原町大字関ヶ原四〇〇八）

「内府公軍記」以降、石田三成の布陣地を小関周辺だとする記述はほぼ全ての軍記に共通する（「戸田左門覚書」のみ例外的に「自害が岡」と記している。「戸田左門覚書」には他にも本書にしか見えない独自情報が多い）が、小関の南に布陣したとする史料（「内府公軍記」杤山本・大和文華館本・蓬左文庫本、「武徳安民記」「手配留」「関ヶ原合戦聞書」「武鑑要略慶長軍記」）と北に布陣したとする史料（「関原始末記」「武家事紀」「黒田家譜」「御合戦記」「大三川志」『図志』『日本戦史』）に分かれる。「笹尾」地名は「備書」が根拠である（「手配留」には「つき尾」とあり、これも同地を指すか）。一方、三成の布陣地を「天満（魔）山」とする史料は「慶長軍記」「石田軍記」「武徳安民記」「大三川志」「関ヶ原進退秘訣」と多々見出せる。近世には三成の布陣地を「天満山」とする見解の方が強かったようであるが、明治期の書籍では「笹尾」説が採用された。現在、石田三成布陣地の標柱が建っている笹尾山の麓には、島左近布陣地の解説パネルが設置されているが、「関原始末記」以降の多くの軍記で左近が石田隊の先陣であったと記載されている。

島津義弘「小池」（関ヶ原町大字関ヶ原一八六九-三）

島津隊が石田隊の右（南）に隣接して布陣していた旨は、島津家臣団覚書以降ほぼ全ての史料に共通している。標柱に記載された「小池」地名は、島津家臣・久保之英が記した「関ヶ原進退秘訣」に登場し、「備書」「手配留」といったローカルな軍記にも同地名が見られ、『戦記略』『図志』『日本戦史』でもこれが採用されている。

小西行長「天満山北」（関ヶ原町大字関ヶ原二三六八-一）

「黒田家譜」「関ヶ原合戦誌記」『史略』『図志』『日本戦史』では、小西隊

が川の後方に布陣していたという旨が記され、他の武将に比して戦闘行為にやや消極的であった描写がなされている。小西行長の布陣地を「天満山北」とする初出は「御合戦記」だが、本書には同所に島津隊・宇喜多隊も共に布陣していたと記載されている。小西隊のみの布陣地を天満山の北とするのは「安楽寺旧記」「備書」「手配留」であり、『戦記略』『図志』『日本戦史』ではこれが採用されている。

宇喜多秀家「天満山南」（関ヶ原町大字関ヶ原四一四六‐一）

宇喜多秀家は、石原峠を下って南東向きに布陣したとする「内府公軍記」の記述を採用している史料が多い（「関原日記」「関ヶ原合戦誌記」「石田軍記」「武徳安民記」「関原軍記大成」「大三川志」「関ヶ原進退秘訣」「慶長中外伝」「武鑑要略慶長軍記」）。標柱に記された「天満山南」は、「安楽寺旧記」「備書」「手配留」に天満山の南の方と記載されているのに基づいている。宇喜多秀家が天満山に布陣したとする見解は江戸時代には少数派であったが、『戦記略』『図志』『日本戦史』ではこの記述が採用されている。「武徳安民記」は他の軍記と異なり、「鷹尾山」に布陣していたと記している。

大谷吉継「宮上」（関ヶ原町大字山中三〇‐一）

大谷隊も宇喜多隊と同様に、石原峠を下って東南向きに布陣した、とする「内府公軍記」の記述を採用している史料が多い（「関原日記」「黒田家譜」「石田軍記」「大三川志」「関ヶ原進退秘訣」「手配留」「武鑑要略慶長軍記」）。そして宇喜多隊とは異なり、藤子川を前に当て岸際に布陣した（「関ヶ原御合戦誌記」「武徳安民記」「関原軍記大成」「大三川志」「慶長中外伝」『史略』）旨が記載されている軍記も多い。史料による布陣情報の差異はあまり大きくない。大谷隊に関する叙述の特徴として、柵を設けていた旨が多くの軍記に記載されている。標柱に記された「宮上」地名は「安楽寺旧記」「備書」「手配留」に見える。

脇坂安治「平野」（関ヶ原町大字藤下四七六‐一）

脇坂安治の布陣地については記載のない史料も多いが、概ね大谷隊に続き松尾山の付近に布陣（「関原始末記」「慶長軍記」「関ヶ原合戦誌記」「関原軍記大成」「慶長中外伝」）したと記されている。『戦記略』『図志』『日本戦史』や標柱では布陣地を「平野」としているが、「平野」地名は近世史料には登場せず、「武徳安民記」に「松尾山ノ近辺平山」とあるのが比較的近い地名である。「陣地考証」によると、大谷吉継の布陣地から中山道を挟んだ南側に一町半ほど（約一五〇メートル）の原野があり、ここが平野と呼ばれていることから脇坂安治布陣地を「平野」に比定した、としている。

小早川秀秋「松尾山」（関ヶ原町大字山中七三一‐一）

小早川秀秋の布陣地を「松尾山」とするのは、「関原始末記」以降ほぼ全ての軍記に共通する（『寛永諸家系図伝』の稲葉正成の項には小早川秀秋が「松尾山」に入ったとの記述があるので、寛永期には既に小早川秀秋が松尾山に布陣したとの情報は存在する）。ただし、「関原始末記」「慶長軍記」に「松尾山の下」と書かれているように、成立年代が比較的早い軍記では小早川隊は山上ではなく山下に部隊を配備していたことになっている。「関ヶ原合戦誌記」以降は、布陣地を山上であると記す軍記が何点か登場し、山下に布陣したとの記述は消える。

毛利秀元「南宮山」（垂井町宮代）

毛利秀元が南宮山に布陣したという旨は、同時代史料（九月十七日吉川広家書状案）から見られ、ほぼ全ての史料で共通している。ただし、毛利秀元・安国寺恵瓊・長束正家・長宗我部盛親が一括で記されている史料がほとんどで、毛利秀元隊が南宮山のどの位置に布陣していたかを記す史料は少ない。「関ヶ原合戦誌記」「慶長中外伝」『史略』では「（他部隊が山下に布陣しているのに対して）南宮山の上」、「武徳安民記」に「（南宮山の中の）雉子篭山」、「関原軍記大成」に「（長宗我部隊と共に）栗原山の嶺」とあるのが、やや例外的な記述である。

長束正家　石碑無し（垂井町宮代一四〇一）

長束正家も「南宮山」に布陣したという点はほぼ全ての史料で共通している（「関ヶ原合戦誌記」「慶長中外伝」『史略』では南宮山下、「関原軍記大成」では南宮山の山頭（異本では「山道」）、『図志』では南宮山下栗原村としている）が、「慶長年中卜斎記」では「伊勢の内かうつこま」と特記されている。

安国寺恵瓊　石碑無し（垂井町宮代）

安国寺恵瓊も「南宮山」に布陣したという点は、前述の毛利隊・長束隊と同様にほぼ全ての史料で共通している（「関ヶ原合戦誌記」「慶長中外伝」『史略』では南宮山下、「関原軍記大成」では南宮山の山頭（異本では「山道」）、『図志』では南宮山下栗原村としている）。例外的に「武家事紀」では、島津隊に隣接して布陣し関ヶ原本戦に参戦したことになっているが、理由は不明である（関ヶ原合戦後に石田三成・小西行長と同様に捕縛・処刑されたため、前者と近い布陣地とされたか）。

長宗我部盛親　石碑無し（垂井町栗原一九九五）

長宗我部盛親も、前述した毛利隊・長束隊・安国寺隊と同様に南宮山に布陣したという点はほぼ全ての史料で共通している。ただし、南宮山の中でも「栗原」に布陣していた旨を特に記す史料（「福富半右衛門親政法名浄安覚書」「黒田家譜」「関原軍記大成」）がしばしば見られ、『図志』『日本戦史』でも栗原に布陣したと記されている。

以上、各武将の布陣情報が、どのように現代伝わっている状態に形成されていったのかを見た。標柱に記載された地名の初出を見ると、大きく三つの布陣認識のターニングポイントが見出せる。一つ目は、「慶長軍記」の存在である。それまで個々の武将の布陣地名を記す史料はほとんど存在しなかったが、「慶長軍記」から武将ごとの地名を記すようになり、徳川家康の「桃配」布陣、福島正則の「関ノ明神」布陣など、「慶長軍記」以来定説となったものも存在する。その一方、石田三成の布陣地を「天満山」とするなど、その情報が現代まで引き継がれていないケースもある。二つ目は、「御合戦記」「安楽寺旧記」「備書」「手配留」といったローカルな軍記の存在である。軍記全体の中では少数派の記述であっても、明治期の書籍や標柱に記された地名のうち半数以上がこれらローカルな軍記の記述に基づいている。三つ目は、明治期の郷土史家・神谷道一による布陣地比定である。近世史料から見つけることのできない地名が標柱に記されている場合は、神谷によってその武将の布陣地に比定された場所であった。標柱に記された地名のうち、「茨原」「平野」は史料中の地名とやや異なり、「柴井」「甲斐墓」は文献上に登場しない地名だが、その地に比定した理由は「陣地考証」に記されている。

近世関ヶ原合戦軍記の集大成的な著作として知られているのは「関原軍記大成」であるが、本書の布陣情報は現代に直接的な影響を与えていない。むしろ布陣情報に関しては、広く流布せず現代ではほとんど研究に使用されていないローカルな軍記が大きな影響を与えている。

第三章　布陣認識の継承

第一章と第二章で見た通り、近世には関ヶ原合戦の布陣認識に統一された見解はなく、現代に伝わっているのは近代に形成された布陣認識である。それでは、布陣認識はどのように定説として伝わっている形に収斂され、継承・定着していったのだろうか。

江戸幕府が滅亡して明治政府が成立すると、徳川氏に憚る必要がなくなり史料公開が進んだため、新たな関ヶ原合戦の叙述が試みられるようになった。その中で最も早く研究を手掛けたのは、陸軍軍人の曾我祐準（一八四三～一九三五）である。曾我は軍職から離れて余暇ができたことを契機に、国内戦史、特に戦国時代を対象とした戦史研究を開始する。[47] その成果として明治二十一年（一八八八）に完成したのが『関ヶ原戦史略』である。曾我は自叙伝の中で「在職中から思ひたつて居た日本戦史編纂もして見度、平岡大佐（芋作）、横井忠直と謀り、先づ一番に戦史材料を集めかけた」[48]と語っている。その直後に陸軍参謀本部が戦史編纂を開始したことによって、曾我は自身の戦史編纂作業を中止する。[49] 以降曾我が主体的に関ヶ原合戦研究を行った様子は見られないが、参謀本部によってこの後に行われる関ヶ原合戦研究には、曾我と共に史料蒐集を行った横井忠直が参加していた。

曾我が軍職から退いた頃、陸軍内でも国内戦史研究の必要性が謳われ始め、参謀本部が編纂事業を行うことになった。そして、研究対象として戦国時代が取り上げられ、その第一弾として関ヶ原合戦を題材とする『日本戦史　関原役』の編纂が開始された。起稿は明治二十二年（一八八九）九月[50]であり、実地調査も九月から行われている[51]。同年九月三十日には「『日本戦史』編纂につき、関ヶ原合戦に関する書籍古文書等を遺漏なく調べて目録を作成し、役所に届けるように」とする岐阜県訓令が出されている[52]。この年の参謀本部による実地調査には「神谷道一ナル者[53]」が数日間に渡って同行して古戦場探索に尽力し、神谷には後日謝金として十五円が贈与されている[54]。

同年九月二十七日～十月十三日に行われた尾濃地方参謀旅行では関ヶ原が演習の舞台となり、川上操六含め参謀本部所属の多くの軍人が関ヶ原を訪れた。演習内容自体は関ヶ原合戦とは関係ないものの、この演習の総裁官であったドイツ人教官ヴィルデンブルヒに関ヶ原合戦について説明するため、パンフレットが書かれている。このパンフレットはその後『関原戦記略』として刊行された[55]。

『戦記略』の編集を担当したのは陸軍軍人・竹内正策（一八五一～一九二二）と、国学者で陸軍大学校教授の横井忠直（一八四五～一九一六）で、両者は日本戦史編纂委員である[56]。横井は前述した通り曾我の史料蒐集に協力している。竹内と横井の二人が実務を担い、『日本戦史』の編纂が行われた。明治二十四年[57]には、参謀本部と帝国大学編年史編纂掛間の史料の貸し出し・返却を巡る書類が多く残っている[58]。他にも、川上が華族会館長浅野長勲に対して、華族諸家に書類借用・質問の担当者を派遣するため事前に華族諸家に通知しておいてほしいとの旨の書簡を送っている[59]。明治二十五年（一八九二）二月二十二日には竹内が『日本戦史』の仮印刷申請をしているので[60]、この時までに編纂作業は一段落ついていたようである。同年十二月二十八日には『日本戦史』の販売を担当する博聞社の長尾景弼から予約広告の文案許可願いが提出されている。『日本戦史』の販売を民間に委託し、新聞広告の打ち合わせをしていることからも、参謀本部が『日本戦史』を広く一般に流通させる意図を持っていたことがわかる。一般販売を開始してからは新聞にも広告が載せられ、大々的に販売された[61]。

曾我や参謀本部が軍事的な観点から関ヶ原合戦研究を試みていたのと同時期に、郷土史として関ヶ原合戦研究を行おうとする動きがあった。神谷道一による研究である。神谷道一（一八二三～一九〇四）は美濃国可児郡久々利村に居を構える千村家家老の家に生まれ、明治十二年（一八七九）に可児郡役所が開かれると初代可児郡長に任命され、岐阜県各地の郡長を歴任した後、明治十八年（一八八五）に還暦を迎えて退官した。神谷本人の談によると、明治十九年（一八八六）秋に岐阜県知事・小崎利準と談話をしていた折に話題が関ヶ原合戦の事になり、そこで小崎から戦史編纂を勧められたため[62]、退官後に関ヶ原合戦研究を始めたという。前述の通り、神谷は参謀本部の戦史編纂事業に協力しており、明治二十二年（一八八九）九月二十八日には参謀旅行演習のために関ヶ原を訪れた参謀官達に、製図師を伴って随行・案内を行い、日本戦史編纂委員とは別に自身の研究のために布陣図を作成している[63]。また、同年十月に小崎の指示で関ヶ原古戦場の各武将の推定布陣地に標柱を建てる事業には、関ヶ原村長・川崎弥六等と共に参加している[64]。神谷は関ヶ原合戦研究の成果として、明治二十五年（一八九二）に『関原合戦図誌』を刊行した[65]。本書の序文は小崎と帝国大学文科大学教授・重野安嗣によって書かれ、内容は事前に「稿本数部ヲ製シテ平素知遇ヲ辱クスル所ノ陸軍中将曾我祐準岐阜県知事小崎利準文学博士重野安嗣陸軍歩兵少佐竹内正策陸軍編修横井忠直帝国大学編年史掛小倉秀貫等[66]」による査読を得ていた。刊行された『図志』は大規模に販売されたようで、『読売新聞』には広告が何度も掲載され、明治二十五年八月十七日朝刊には書評も載せられた。明治二十六年（一八九三）二月二十日朝刊に掲載された広告には再販された旨が記されている。

以上、明治十年代末～二十年代半ばに異なる立場の研究主体から関ヶ原合戦研究が行われた様子を見た。曾我祐準は明治二十一年に『関ヶ原戦史略』を、神谷道一は明治二十五年に『関原合戦図志』を、参謀本部は明治二十六年（編纂作業自体は明治二十五年に終了）に『日本戦史　関原役』を完成させた。これらの研究成果、特に『日本戦史』と『図志』は全国的な出版ルートに乗っ

たため、その内容が大規模に普及した。両書の特徴は、近世に版本で刊行された軍記ではなく、写本で伝来したローカルな軍記の記載内容を多く採用している点である。『図志』緒言には「諸書ヲ渉猟シ其性質ヲ考察シ虚ヲ捨テ実ヲ取リ其要ヲ摘記シテ開戦経緯編廿五冊ヲ輯成セリ[67]」、『日本戦史』凡例には「此書ノ編纂勉メテ材料ヲ精選シ最モ確実信スヘキ者ヲ採レリ[68]」とあり、両者とも信憑性の高い史料に基づいて関ヶ原合戦を叙述した旨を記している。この観点から採用されたのが、「御合戦記」「安楽寺旧記」「備書」「手配留」といったローカルな軍記に基づく布陣情報だったと考えられる。布陣情報に関して両書の記載内容にほぼ矛盾はないが、『日本戦史』には具体的な布陣地名が書かれていない武将が多く、諸説ある場合は明言を避けた記述がなされる。一方の『図志』は、基本的にはローカルな軍記の記載内容に基づいた上で、それでも疑問が残る布陣地や軍記に記載のない布陣地に関しては神谷自身が比定した具体的な地名を記しており、現在関ヶ原現地にある標柱に記載された地名は『図志』[69]（の附録である「陣地考証」）の記述と一致する。

　徳富蘇峰『近世日本国民史』や二木謙一『関ケ原合戦』[70]、各自治体史（『不破郡史』[71]『関ケ原町史』[72]等）といった、近現代に刊行された影響力の強い関ヶ原合戦関連書籍は、布陣図に関してはほぼ『図志』掲載図か『日本戦史』掲載図を踏襲しており、『図志』『日本戦史』の強い影響力が伺える。

　その後、関ヶ原合戦は研究以外の面から注目を集める。明治二十年代後半～明治四十年代にかけて、紀行文や旅行ガイド本で関ヶ原古戦場が多々取り上げられており[73]、新聞に目を通すと「関ヶ原三百年祭」関連記事が散見される。『東京朝日新聞』明治三十二年（一八九九）五月五日朝刊記事に関ヶ原合戦三百年記念会の計画が持ち上がっている旨が、同年十月二十日朝刊記事には本月十五日が関ケ原合戦三百年に相当するので古戦場を弔う者が多い旨、三百年祭は翌年執行することになったという旨が記載されている。実際に関ヶ原合戦三百年祭が行われたのは明治三十九年（一九〇六）で、『読売新聞』明治三十九年五月二十九日朝刊記事には、記念祭は明治三十七年（一九〇四）九月十五日に実施する予定であったが日露戦争中のため中止された旨、本年九月十五日に関ヶ原陣場野で大祭を執行する旨が記されている。明治三十九年八月～九月の『岐阜日日新聞』上には関ヶ原三百年祭の準備や内情に関する記事がしばしば掲載され[74]、これらの記事から、現在も古戦場跡に建っている明治三十九年製石製標柱が、関ヶ原三百年祭にあたって設置されたものだと判明する。関ヶ原三百年祭は十月十二日～十四日に実施され、『岐阜日日新聞』には祭の様子に関する記事が連日掲載された[75]。三百年祭の開催目的は戦死者慰霊のためとされ、東本願寺法主大谷光瑩による読経式が行われているが、厳かな催しに終始したわけではなく、絵葉書や記念スタンプが販売されて見世物小屋や出店が立つなど、現代の関ヶ原合戦祭り（大関ヶ原祭）に近い様相も呈していた。

　その後、昭和六年（一九三一）に関ヶ原古戦場は国指定史跡となり、地元で行われた布陣地の比定結果が国家から追認されることになる。その後も、標柱がなかった場所に山内一豊陣跡の解説パネルが設置されたり、平成二十五年に細川忠興陣跡の石碑が設置されたりと、（土地開発の都合により一部標柱の位置が移動しながらも）明治中期の研究成果に則した場所を行政が布陣地として認定することで、近代に形成された布陣認識が現代まで継承されている。

おわりに

本稿では、関ヶ原合戦の近世における布陣認識の変遷とその背景、近代における定説形成と現代への継承過程を明らかにした。

　布陣地を検討する上で重要な絵画史料（合戦図や配陣図）を扱うことができず、使用した個々の軍記に関する詳細な検討は後回しとなったが、布陣情報に関する基礎的データを一覧化し、近世～近代の布陣認識の総体を把握したことで、布陣認識の変遷・形成・継承過程を概ね追うことができたと考えている。本稿が、合戦の実像・実態を探る上でも、合戦像の形成・伝来とその背景にある社会文化思想を考察する上でも、史跡整備・古戦場活用史を把握して地域振興に活用する上でも、基礎となる情報を提示できていれば幸いである。

謝辞

本研究にあたってはJSPS科研費JP23KJ2049の助成を受けた。また、所蔵史料の閲覧・撮影に便宜を図っていただいた大阪城天守閣、名古屋市蓬左文庫、岐阜県図書館、岐阜関ケ原古戦場記念館、可児郷土歴史館に謹んで感謝の意を表する。

注

（1）管見の限り、関ヶ原合戦を「天下分け目」と称した初見史料は、太田牛一「内府公軍記」（一六〇七年までに成立）である

（2）代表的な研究としては、桐野作人『関ケ原　島津退き口』（学研パブリッシング、二〇一三年）、白峰旬『新解釈　関ヶ原合戦の真実　脚色された天下分け目の戦い』（宮帯出版社、二〇一四年）、白峰旬『新視点　関ヶ原合戦　天下分け目の戦いの通説を覆す』（平凡社、二〇一九年）、白峰旬編『関ヶ原大乱、本当の勝者』（朝日新聞出版会、二〇二〇年）、乃至政彦・高橋陽介『天下分け目の関ヶ原の合戦はなかった』（河出書房新社、二〇一八年）、乃至政彦『戦国大変』（ワニブックス、二〇二三年）、水野伍貴『関ヶ原合戦を復元する』（星海社、二〇二二年）等が存在する

（3）代表的な研究としては、井上泰至編『関ヶ原はいかに語られたか　いくさをめぐる記憶と言説』（勉誠出版、二〇一七年）、井上泰至・湯浅佳子編『関ヶ原合戦を読む　慶長軍記翻刻・解説』（勉誠出版、二〇一九年）、『戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究』（二〇一六年度～二〇一八年度科研費〈基盤B〉研究成果報告書、二〇一九年）、『戦国軍記・合戦図の史料学的研究』（二〇二〇年度～二〇二三年度科研費〈基盤A〉研究成果報告書、二〇二四年）等が存在する

（4）小池絵千花「関ヶ原合戦の布陣地に関する考察」『地方史研究』四一一号、二〇二一年

（5）慶長五年九月十七日吉川広家自筆書状案（『大日本古文書　吉川家文書之二』九一三号）、九月十七日石川康通・彦坂元正連署状案　福岡市史編集委員会編『新修福岡市史　資料編中世一　市内所在文書』（福岡県、二〇一〇年、堀文書五、一七七頁）、九月二〇日近衛信尹宛近衛前久書状（藤井讓治「前久が手にした関ケ原情報」田島公編『禁裏・公家文庫研究』第六輯、思文閣出版、二〇一七年）、十月八日秋田実季宛最上義光書状（横手市『横手市史　史料編　古代・中世』横手市、二〇〇六年、三四三号）、九月三十日留守政景宛伊達政宗書状（『仙台市史　資料編十一巻、二〇〇三年、一〇八二号）

（6）『舜旧記』慶長五年九月十五日条（続群書類従完成会編『史料纂集〔第二期〕舜旧記　第二』鎌田純一校訂、続群書類従完成会、一九七〇年）

（7）大澤泉「史料紹介　杤山斉氏所蔵『内府公軍記』について」『大阪城天守閣紀要』三七号、二〇〇九年

（8）伊藤敏子「太田和泉守自筆本「内府公軍記」」（『大和文化研究』一三巻七号、一九六八年）、大和文華館所蔵「内府公軍記」（国文学研究資料館所蔵マイクロ資料鈴鹿文庫二-三四三八、請求番号：二五七-一八七-三N三〇七七）

（9）小池絵千花「名古屋市蓬左文庫所蔵『太田和泉守記　全』の全文翻刻」（『戦国軍記・合戦図の史料学的研究』二〇二〇年度～二〇二三年科研費〈基盤A〉研究成果報告書、二〇二四年）、名古屋市蓬左文庫所蔵「太田和泉守記　全」（請求番号：一〇五-三二）

「内府公軍記」諸本の成立年と成立順については、前掲注(7)の【大澤二〇〇九】で考察されている

（10）吉川広家覚書案写『大日本古文書　吉川家文書之二』九一七号

（11）「藤堂家覚書」近藤瓶城編『改訂史籍集覧　第十五冊』近藤活版所、一九〇二年

（12）鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料　旧記雑録後編三』（鹿児島県、一九八三年）所収の一三〇九～一三一五号「山田晏斎覚書」、一三一九号「黒木左近兵衛申分」、一三三一～一三三三号「神戸久五郎覚書」、一三四〇号無記名覚書、一三六一号「大重平六覚書」、一四〇四号「慶長五年於関ヶ原御合戦之砌木脇休作殿働之次第神戸五兵衛覚書写」、一四〇五号「黒木左近平山九郎左衛門覚書」、一四〇七号「井上主膳覚書」

（13）「福富半右衛門親政法名浄安覚書」史籍集覧研究会『改訂史籍集覧　第十五冊』すみや書房、一九六八年

（14）板坂卜斎如春「慶長年中卜斎記」近藤瓶城編『改訂史籍集覧　第二十六冊』近藤出版部、一九〇二年

（15）「脇坂家伝記」史籍集覧研究会『改訂史籍集覧　第十五冊』すみや書房、一九六八年

（16）戸田氏鉄「戸田左門覚書」地域研究史料館「史料紹介『戸田左門覚書』」『地域史研究』一一六号、二〇一七年

（17）酒井忠勝・林道春・春斎編「関原始末記」近藤瓶城編『改訂史籍集覧　第二十六冊』近藤出版部、一九〇二年

（18）石川昌隆「石川正西聞見集」埼玉県立図書館編『石川正西聞見集』一九六八年

（19）「細川忠興軍功記」近藤瓶城編『改訂史籍集覧　第十五冊』近藤活版所、一九〇二年

（20）植木悦「慶長軍記」井上泰至・湯浅佳子編『関ヶ原合戦を読む　慶長軍記翻刻・解説』勉誠出版、二〇一九年

（21）山鹿素行「武家事紀」山鹿素行先生全集刊行会編『武家事紀　中巻』原書房、（復刻原本一九一五年）一九八二年

（22）阿部忠秋「関原日記」内閣文庫所蔵「関ヶ原記」（請求番号：一六八-〇一四八）

(23)「島津家譜」近藤瓶城編『改訂史籍集覧　第十五冊』近藤活版所、一九〇二年

(24)峯賀高亮「関ヶ原合戦誌記」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇三九九～一〇〇〇四二六）

(25)『新訂黒田家譜』校訂：川添昭二・福岡古文書を読む会、第一巻、文献出版、一九八三年

(26)「石田軍記」黒川真道編『国史叢書　石田軍記全・仙道軍記全』国史研究会、一九一四年

(27)「関ヶ原御合戦記」岐阜史談会編『関ケ原御合戦備書・関ケ原御合戦記・関ケ原御陣御備御手配留　合冊』一九三一年

(28)木村高敦「武徳安民記」内閣文庫本所蔵（請求番号：一五〇‐〇〇〇五）

(29)宮川忍斎「関原軍記大成」黒川真道編『関原軍記大成』三巻、国史研究会、一九一六年

(30)「関ヶ原軍記大全」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇一一一～一〇〇〇一二六）

(31)「赤坂安楽寺旧記」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇三九八）

(32)松平頼寛「大三川志」国立公文書館所蔵（請求番号：特〇四三‐〇〇〇二）

(33)久保之英「関ヶ原進退秘訣」東京大学史料編纂所所蔵（請求記号：島津家本‐さI‐一二‐三三‐九）

(34)堀麦水「慶長中外伝」鹿児島大学附属図書館所蔵、玉里文庫天五五‐五六九（国書データベースマイクロ請求記号：〇九一‐〇〇四一‐〇〇二）

(35)「関ヶ原御合戦備書」岐阜史談会編『関ケ原御合戦備書・関ケ原御合戦記・関ケ原御陣御備御手配留　合冊』一九三一年

(36)「関ヶ原御陣御備手配留」岐阜史談会編『関ケ原御合戦備書・関ケ原御合戦記・関ケ原御陣御備御手配留　合冊』一九三一年

(37)「関ヶ原合戦聞書」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇四三三）

(38)「慶長擾乱」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇三二九～一〇〇〇三三二）

(39)「武鑑要略慶長軍記」岐阜県図書館所蔵（資料番号：一〇〇〇三三四～一〇〇〇三三五）

(40)曽我祐準『関ヶ原戦史略』岐阜県図書館所蔵、一八八八年（資料番号：一〇〇〇三九四）

(41)竹内正策・横井忠直編『関原戦記略』原定吉、一八八九年

(42)神谷道一『関原合戦図志』小林新兵衛、一八九二年

(43)日本戦史編纂委員編『日本戦史　関原役』本編、博聞社、一八九三年

(44)井上泰至「軍記と屏風をつなぐもの　軍学・絵図・工房」『軍記と語り物』五四号、二〇一八年

(45)「関ヶ原御合戦記」古典遺産の会編『戦国軍記事典　天下統一篇』和泉書院、二〇一一年、四六二～四六四頁

(46)明治末期～昭和戦中期にかけて山内家で編纂された史料集『山内家史料　第一代一豊公紀』では、「関原始末記ニハ明カニソノ氏名ヲ記サヾルモ三河遠江駿河ノ兵ガ南宮山ノ敵ニ備フルコトヲ記セリ、公ハ当時遠江掛川城主タリ、然ラバコノ遠江ノ兵ハ公及ヒ堀尾氏ノ兵ヲ指セシモノナルベシ」と捉えている（山内家史料刊行委員会編『山内家史料　第一代　一豊公紀』山内神社宝物資料館、一九八〇年、三七七頁）

(47)曾我祐準『曾我祐準翁自叙伝』大空社、一九八八年、三五四～三五五頁

(48)前掲注(47)三五四～三五五頁

(49)前掲注(47)三五五頁

(50)JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C07081787700、明治二十五年自一月至十二月　参謀本部大日記　参人（防衛省防衛研究所）

(51)『岐阜日日新聞』二四〇三号、明治二十二年九月二十七日記事

(52)「岐阜県訓令甲第二十一号」『岐阜日日新聞』一四〇六号、明治二十二年十月一日記事

(53)JACAR：C06081022300、明治二十二年「貳大日記 十二月」（防衛省防衛研究所）

(54)JACAR：C06081022300、明治二十二年「貳大日記 十二月」（防衛省防衛研究所）

(55)竹内正策・横井忠直編『関原戦記略』原定吉、一八八九年

(56)横井忠直については、高橋昌明「戦国戦史と近代陸軍」（『東アジア武人政権の比較史的研究』校倉書房、二〇一六年）に詳しい

(57)『日本戦史』編纂とは関係ないが、明治二十四年には山県有朋と桂太郎が関ヶ原古戦場を訪れている。この時に山県が「東西両軍の布陣を見るに、東軍よりもむしろ西軍の方が有利である」と語ったという旨が『岐阜日日新聞』明治二十四年八月十五日記事（二九七一号）・『読売新聞』明治二十四年八月十八日朝刊記事に載っている。関ヶ原合戦の布陣を見たメッケルが「西軍の勝ち」と述べたという著名な逸話があるが（二木謙一『関ケ原合戦』中央公論社、一九八二年や小和田哲男編『関ヶ原合戦のすべて』新人物往来社、一九八四年にも掲載）、これは乃至政彦『戦国の陣形』（講談社、二〇一六年）、白峰旬「メッケル少佐の関ヶ原視察とメッケル伝説」（『史学論叢』五二号、二〇二二年）などによって事実でないと立証されている。筆者は、当該逸話はこの時の山県有朋の発言と明治十九年にメッケルが関ヶ原を訪れた事実が混ざって形成されたものではないかと考えている

(58)JACAR：C07081727400・C07081727500・C07081727600・C07081727700・C07081727800・C07081728000・C07081728100、明治二十四年自一月至十二月　参謀本部大日記　参地（防衛省防衛研究所）

(59)JACAR：C07081751300、明治二十四年自一月至十二月　参謀本部大日記　参地（防衛省防衛研究所）

(60)JACAR：C07081788000、明治二十五年自一月至十二月　参謀本部大日記　参人（防衛省防衛研究所）

(61)『東京朝日新聞』明治二十六年八月二十九日朝刊記事、同九月二十三日朝刊広告等

(62) 前掲注(42)一頁

(63) 神谷が九月二十八日に竹内・横井と共に古戦場調査を行った旨は、岐阜県図書館所蔵の神谷道一自筆「関原古戦場実地莅検記」に記載。また、製図師を伴った調査であったことは『岐阜日日新聞』一四二三号、明治二十二年十月二十二日記事に拠る

(64) 前掲注(42)「附録関原陣地考証」七～八頁

(65)『図志』の編纂過程は、可児光生「神谷道一『関ヶ原合戦図志』編纂をめぐって」(『年報近現代史研究』一〇号、二〇一八年)に詳しい

(66) 前掲注(42)緒言四頁

(67) 前掲注(42)緒言三頁。「開戦経緯編」とは、神谷が関ヶ原合戦研究を行う上で作成した史料集である。可児郷土歴史館が原本を所蔵している

(68) 前掲注(43)凡例五頁

(69) 徳富猪一郎『近世日本国民史家康時代』上巻、民友社、一九二三年

(70) 二木謙一『関ケ原合戦　戦国のいちばん長い日』中央公論社、一九八二年

(71) 不破郡教育会編『不破郡史』上巻、西濃印刷株式会社出版部、一九二六年

(72) 関ケ原町編『関ケ原町史』通史編上巻、一九九〇年

(73) 桜井純一編『東海道鉄道遊賞旅行案内』(丸善商社、一八九四年)、矢野政二『書生の旅』(東華堂、一九〇三年)、東輝文編『古今雅俗東海鉄道名所記』(岡島書店、一九〇三年)、野沢潤『記事紀行文　千景万色』(大阪偉業館、一九〇四年)、清水貞雄『汽車の旅　家庭教育』第二編(宝文館、一九〇六年)、神谷市郎編『東海道旅の友　車窓の名勝観』(博文館、一九〇九年)等

(74)『岐阜日日新聞』明治三十九年八月十八日記事(七四六六号)、八月二十九日記事(七四七五号)、九月一日記事(七四七八号)、九月四日記事(七四八〇号)

(75)『岐阜日日新聞』明治三十九年十月十二日記事(七五一二号)、十月十三日記事(七五一三号)、十月十四日記事(七五一四号)、十月十六日記事(七五一五号)

Perceptions of the Battle Formation at Sekigahara from early modern period to modern period.

Echika KOIKE

Abstract

This paper examines the perception of the Battle of Sekigahara. Specifically, it examines how the belief about the positions of troops was formed, what the grounds for this belief were, and how this belief was disseminated.

Chapter 1 provides an overview of the historical materials related to the Battle of Sekigahara and analyzes how the descriptions of troop formations evolved over time. It was found that information gradually became more detailed up until the latter half of the 17th century. However, military chronicles compiled during the 18th century contained little new information. Therefore, it is evident that the amount of information did not necessarily increase over time. During the early modern period, the understanding did not converge into a single perception, and it was not until the modern era that what could be called a standardized theory was established.

Chapter 2 examines how the information about troop formations was gathered for each general. There were three major turning points. The first was the "*Keicho Gunki,*" compiled in the 1660s; the second was local military chronicles; and the third was the identification of deployment sites by Kamiya Michikazu during the Meiji period.

In Chapter 3, we investigate how the perception of troop deployment converged in the modern times and how it was established. From the late 1880s to the 1890s, various people began reexamining the Battle of Sekigahara. It was revealed that the perception of troop deployment, which is now considered the standard theory, was formed through Kamiya Michikazu's work "*Sekigahara Kassen Zushi*" and the "Japanese Military History: The Battle of Sekigahara" compiled by the Army General Staff. Subsequent information was gathered not so much for research as for tourism and regional administration. In this process, the theory of the mid-Meiji period became established as the conventional view, leading to the contemporary perception of troop deployment.